

マキバノハナゾ ノ 計画

2015/12/25(金)

農学国際特論 I
IPADS Development Studies

Group 3:
I I T A T E 班

目次

1.	まえがき	
.....	4
2.	プロジェクトの経緯	
.....	5
2-1	経緯	5
2-2	対象地	7
2-3	目的	8
2-4	活動の流れ	8
3.	花園のコンセプト	10
4.	花園のアイディア	12
4-1	恩返し案	12
(1)	バラのトンネル	
(2)	いいたて花壇	
(3)	レインボーローズ	
(4)	思い出の掲示板	
(5)	憩いの場	
(6)	モニュメント	
(7)	イベント	
4-2	園内ガイド案	18
(1)	アプリケーション案	
1.	アプリケーションの基本的な機能	
2.	全体像	
3.	各ゾーンの内容	
(2)	パンフレット案	
1.	パンフレットの位置づけ	
2.	パンフレットの仕様	
5.	維持管理における課題と解決案	

.....	30	
5-1 資金調		
達.....		
.....	31	
5-2		作業人
員.....		
.....	32	
5-3		広報戦
略.....		
.....	32	
(1) 概要		
(2) 広報戦略		
(3) ターゲット		
(4) 施策		
(5) 非デジタル施策		
6.		今後の方
針.....		
.....	33	
6-1 アイディアのブラッシュアッ		
プ.....		
33		
6-2 大久保さんとの話し合い継		
続.....		33
6-3 バラ園づく		
り.....		
.....	33	
6-4 アプリの試作品開		
発.....		
.....	33	
7.		個人の感
想.....		
.....	34	
8.		参考文
献.....		
.....	36	
9.		謝
辞.....		
.....	37	
10.		付
録.....		
.....	37	

Executive Summary:

On March 12, 2011, Due to the effects of the Earthquake and Tsunami that hit Japan, there was a core meltdown at Fukushima Daiichi power plant, which resulted in severe radioactive damage affecting the area surrounding the plant. An evacuation order was given to residents in villages nearby. One of these residents was Mr Ohkubo, a resident of litate Village.

Mr Ohkubo had lived all his life and worked very hard to obtain the land he was cultivating. All of his life's work was lost in an instant, and the area turned into near radioactive wasteland. Faced with the evacuation order, and the prospect of losing the fruit of his efforts, he decided on acting against the order and returned alone to litate Village. Due to the soil contamination, and the fact that people would not buy Fukushima produce, he turned his attention on flowers. Thus, his dream of a Flower Garden was born.

Mr Ohkubo's dream, was to create a flower garden as a way to remember what happened, and as a way to thank all the volunteers and workers who were toiling away at Fukushima. Unfortunately, he wasn't quite sure of how to proceed, and what to do. Our project started with several interviews with Mr Ohkubo in order to grasp the basic ideas he had, and begin to work on ways to bring his vision to life.

Our main plan is to use ITC to help paint a more vivid picture and convey emotions more effectively during the visits in litate Village Rose Garden. ITC Apps will be created in order to give historical information, provide facts, and give explanations about the meaning behind the different scenarios present. This App is expected to work using GPS system.

The efforts made by the people involved will not only stop there. It is being planned, that, in effort to promote the knowledge of litate Village and its Rose Garden, agricultural classes, social media publicity, and other social work will be realized in schools and villages nearby in order to expand the general public's notice.

1. まえがき

皆さんは自然の山が人の手によって消失した事を信じられるだろうか？飯館村にいくつものピラミッドが立ち並んでいることをご存じだろうか？

私たちのチームが初めて飯館村に訪問したのは2015年10月24日、丁度色づき始めた葉が秋の絶景を作り出す頃である。メンバーのほとんどは飯館村に行ったことがなかったのだが、その光景に一同激震が走った。行き場のないフレコンバックが作り出すピラミッド、客土に使うため削られて原型が無くなった山、誰も歩いていない街。さらに現地の方々に聞けば聞くほど伝わってくる壊れた絆や心の病、まさに目には見えないものとの戦いである。しかし、その中にも人々の「意志」によって生み出された希望の光がいくつも存在していた。活力的に奮闘するふくしま再生の会や飯館の土地に戻って農業や花作りをする事を夢見て今を全力で生きている高橋日出夫さん、その奥様・民さん。そして避難指示解除を待たずに飯館の土地に根を張って花園作りに命を懸けて取り組む大久保金一さん。その目の力強さには愚直なまでに逞しき意志が宿っていた。確かに関わるきっかけはただの授業にすぎなかったが、この瞬間人の人生に関わる本プロジェクトは授業の枠を超え、花園の「実現」まで誠心誠意尽くして邁進するプロジェクトとなった。

この特論でのグループワークは、「大久保さんへの聞き取り→コンセプト・アイディア提示→修正→双方の合意に基づくプラン決定→維持管理への課題解決→実施」という一連のアクションプランの中で花園のデザイン案の「アイディアの提示」の段階までであり、無論維持管理への課題は今後解決していくものである。授業期間内での本プロジェクトは後程記している活動に沿って進められており、本稿では12月6日にアイディアを大久保さんやふくしま再生の会の数名の方々等にプレゼンし、得られたフィードバックを反映したものを掲載している。本稿によって飯館村や先の震災の被災地の復興に何かしらの興味を抱いて頂けることを願っている。また、新たなアイディアやフィードバックは常に背中を押すものであり、本稿をご覧になる皆様に更なるご指導を頂けるのであれば、それほど幸いなことはない。

最後に本プロジェクトが飯館の皆さんの大きな力になることを願ってまえがきとする。

執筆担当者

石渡 尚之	国際情報農学研究室	博士課程2年
佐藤 聡太	国際情報農学研究室	修士課程1年
岸田 峻太郎	国際情報農学研究室	修士課程1年
上田 大晃	国際環境経済学研究室	修士課程1年
芝原 直也	国際植物資源科学研究室	修士課程1年
金子 大成	国際植物資源科学研究室	修士課程1年
安島 悠	国際植物資源科学研究室	修士課程1年
Daniel González	IPADS	
Fateme Muhammad	IPADS	

指導担当教員

溝口 勝	国際情報農学研究室	教授
林 直樹	国際情報農学研究室	特任助教



2. プロジェクトの経緯

2-1 経緯

(1) 大久保金一さん

1. 花との出会い

大久保金一さん（以下大久保さん）は1940年生まれの75歳（2015年現在）男性である。1947年に飯館村小宮地区萱刈庭（当時の地名は牧場）にご家族とともに入植し、以来2011年の東日本大震災まで母親とともに同地区で生活していた。

小学校の通学路の山道で春先から秋まで花を眺めて歩いてきたという経験がきっかけで花を好きになった。当時からクリンソウやヤマシャクヤクなど、気に入った野草を大事に持ち帰って植えたりしていたという。以来、花は大久保さんにとって最も心が落ち着くものであり、最も大切なものとなった。

2. 東日本大震災～原発事故～避難生活

2011年3月11日に東日本大震災が発生し、同日福島第一原子力発電所事故が起こった。当初、原発から20km圏内の地域住民に政府から避難指示が出されたが、原発から30km～45kmに位置する飯館村に屋内指示が出されたのは3月15日、本格的な全村避難が開始されたのは5月15日、事故発生後一か月もたった後だった。

村の仮設住宅に入居できたのは同年7月19日であったが、仮設住宅での生活は足腰の弱った母コトさんにとっては大変不便であり、役所をお願いした介護サービスにも不満があったという。同9月上旬から帰村の日のために村内の各自宅の農地の手入れをする許可が出て、戻ってみたが田畑はイノシシに荒らされてしまっていた。大久保さんはご自身が元気なうちは自分の手で農地を再生しようと、母コトさんを連れてたびたび村内の自宅に通うこととなった。自宅の周りに、裏山から土を運び放射性を遮蔽する作業もしていたという。自宅に帰るたびに母コトさんが「どうしてもまた仮設に戻らなくてはいけないのか。」と悲しそうになるのを見て、大久保さんも何とも言えない寂しさ、悲しさがこみ上げてきたようだ。「雪が積もれば放射線が遮蔽される。」という話を聞き、2012年の正月は自宅で迎えることにした。

やがて大久保さん自身も慣れない生活とストレスのために体調を崩すようになった。大久保さんは、故郷での、愛する花に囲まれた生活を取り戻すために母親と村内の自宅に戻る決断をした。誰もいなくなった村で、あきらめることなくできる限りの除染をし、草刈りをし、花を植え、母親の世話をすることとなった。

ふくしま再生の会理事長の田尾陽一さんと副理事長の菅野宗夫さんが、大久保さんのことを伝え聞いて訪ねたのは2013年3月下旬のことである。ふくしま再生の会は飯館村村民、支援者（ボランティア）、研究者（専門家）の「協働」を掲げて活動しているNPO法人であり、大久保さんの農地で農地除染実験や試験作付けをしたいということであった。大久保さんは、自分がこの土地で生きていくために少しでも可能性があるのなら、という思いで「協働」を受け入れた。

この土地を花でいっぱいになりたいという思いと、ふくしま再生の会をはじめとする、様々な方とのかかわりから、大久保さんは「マキバノハナゾノ計画」を考えるようになった。原発事故の記憶を風化させないために、この土地に誰もが忘れられない花の風景を作りたい。お世話になった方々に桜の木を一本一本植えてもらい、恩返しをしたい。これが大久保さんの「マキバノハナゾノ計画」である。桜の植樹会は2014年4月14日と21日の2回に渡り実現し、100名を超える方々が集まった。

表1：原発事故後における大久保さんの生活の背景

2011	3/11	東日本大震災が発生。 津波による福島第一原発の事故。
	4/22	飯館村が計画的避難区域に指定される。

	5/15	本格的全村避難が開始。
	6/23	大久保さん親子、県内のホテルに避難。
	7/19	大久保さん親子、飯野仮設に入居
2011	9~	自宅の管理のために入村の許可が下りる。
	12/31	大久保さん、小宮の自宅での生活を決断。
2013	3~	大久保さん、ふくしま再生の会副会長 菅野宗夫さんと出会う。
	4/13,20	桜の植樹会開催

(2)マキバノハナゾノ計画

1. 石渡の社会イノベーションプロジェクト「薔薇の谷計画」

社会イノベーションプロジェクトとは、東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラムGCL（ソーシャルICTグローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム）の博士研究助成事業である。ここでは、石渡が発案、計画したプロジェクトについて説明する。

石渡は、「復興は人であり、人と人とのつながり、コミュニケーションが回復することである。」という信念のもとで、飯館村の復興を考えていた。当初、人と人がつながるために飯館村民の避難先全戸にタブレット端末が配布されていた。ところが村のアンケートで、人々がタブレット端末に期待することのほとんどが、各種情報の収集や事業再開等の支援であり、「人と人がつながる」という基本方針とは大きくかけ離れたものである、という問題があった。ICTとしてのタブレット端末の利用を促すために石渡が考案したのが、「薔薇の谷計画」である。人と人がつながるための場をリアルとバーチャルに作るというものである。

「リアルな薔薇の谷」では、バラの管理を行う組織づくりをする。人間の管理が必要であるという観点からあえてバラという花を利用し、土や植物に触る機会を失った村民の方々が集まれる場を作る。村民から農地を借用することで用地を確保し、出資者には栽培したバラの花を贈与するという形で還元する。入園料や土産販売から収入を得る。「バーチャルな薔薇の谷」では、配布済みのタブレット端末を利用し、人と人が相互に情報交換ができるシステムを開発する。

以上が「薔薇の谷計画」の概要である。

2. 大久保さんの思いとの融合

石渡の指導教員であり、NPO法人ふくしま再生の会副理事長でもある溝口勝教授が、大久保さんの農地で除染実験やモニタリング調査をしていたという縁があり、この「薔薇の谷計画」はやがて大久保さんの耳に入った。既述したように、大久保さんの「マキバノハナゾノ計画」は、自分の生まれ育った土地を花でいっぱいになりたいという大久保さんの思いがあったものの、具体的に何をすればいいのかわからないという点もいくつかあった。もともといろいろな花を植えたいと思っていた大久保さんは、石渡の「薔薇の谷計画」を気に入り、「マキバノハナゾノ」に「バラ」が組み込まれる形となった。こうして「新たな」マキバノハナゾノ計画が誕生した。

本プロジェクトは大久保さんのバラのマネジメントを考案するということが発端となっている。後述するアイディアは、石渡の考案したオリジナルなアイディアが基となっているのではなく、本プロジェクト参加者から生み出されたものであるということを強調しておきたい。

2-2. 対象地



図2-2.1 飯舘村の場所(©litate Villageより引用)



図2-2.2 大久保さんの土地全体図(2015年10月24日 金子撮影)

大久保さんの土地は、福島県東北部の飯舘村(図2-2.1)村内に位置する。前述の通り、飯舘村は震災以降現在に至るまで全村避難指示が継続している。

図2-2.2が大久保さんの土地である。土地の一部には既に、桜やリンドウの苗が植わっており、水芭蕉など他数種の定植が決まっている箇所もある。

今回我々が提案したのは、バラ園予定地(図2-2.2左下部分)のデザインと、土地全体を用いたガイド案である。

2-3. 目的

我々が最終的に目指すべき目標は、「土地を花でいっぱいになりたい」という思いを持ち、また「震災後に助けてくれたボランティアの方々への恩返しをしたい」、「震災の記憶を風化させず人々へ伝えていきたい」という大久保さんの願いを達成できるような花園を作ることである。

特に、新たに計画に組み込まれた「バラ」に関して、どのような願いを込めたバラ園を作るか、そしてバラを含めた花園全体をどう作っていくかについては、まだ詳細な提案・実行がされていない状況であった。そのため、本プロジェクトで現実に達成すべき目的は、まず大久保さんへの聞き取りから、大久保さんが花園に込める願いを再度明確にした上で、大久保さんの願いを達成できるよう、バラ園のデザインと、必要ならばバラを含めた花園全体のデザインを提案し、実行をサポートすることである。

2-4. 活動の流れ

グループの大まかな活動は次ページ表2のとおりである。途中、考えるべき内容の違いによってグループを3つに分け(11/6～)、小グループごとに適宜集まり、それぞれに担当内容の議論を重ねた。

表に書かれている事柄には、授業の一貫として行ったグループワークと、今後授業の枠を超えて行う予定の活動、2種類の活動が含まれている。

表2. 活動の流れ

日付		内容	段階
2015	10/2	グループメンバーの自己紹介、プロジェクトの導入理解	導入・情報収集
	10/7	大久保さんと電話	
	10/9	アクションプラン発表（講義）	
	10/16	バラ園見学（於 旧古川庭園）	
	10/21, 23	下見の聞き取り事項確認、デザイン書き出し	
	10/24, 25	下見	下見
	10/30	下見のフィードバック共有	デザイン 考案
	11/6	目的別に小グループ分け、小グループごとに議論 （恩返し：佐藤・芝原・安島、園内ガイド：上田・金子・岸田、 情報発信戦略：Fateme・Daniel）	
	11/13	各班中間報告、丹羽さん（溝口研秘書・ふくしま再生の会）に話を聴く	
	11/20	各班進捗報告、アイデア共有、今後の方針議論	
	11/26	FUJITSU、GK Design、ふくしま再生の会の方々を交えて議論	
	11/27	合宿でのプレゼンの方向性共有・今後のスケジュール確認	
	11/30	アイデアを統合	
	12/3	各班進捗報告・発表資料作成役割分担	
12/4	発表資料作成		
12/5, 6	飯舘村合宿・アイデアプレゼン	デザイン 提案	
12/7	フィードバック共有、報告書草稿作成役割分担	報告書 作成 今後	
12/11	報告書草稿提出		
12/18	プレゼンテーション（講義）		
12/25	報告書提出		
2016～		アイデア改善・再提案・アプリケーション開発・造園	

3. 花園のコンセプト

先述したように本プロジェクトの目的は、大久保さんの望む花園をデザインすることであり、単純に花の配置を考案することに留まらない。つまり、大久保さんが花園を通して何を達成したいのかを把握し、それを実現するための花園の形を提案することが必要だった。

プロジェクト発足当初は大久保さんの望みや想い、達成したいことに関する情報が不十分だった。そこで、大久保さんの想いを起点にバラ園をデザインすべく、10/7に大久保さんに電話でインタビューし、10/24-25に事前調査として実際に大久保さん宅を訪問し、非構造化インタビュー(※)を行った。インタビューの結果から、大久保さんがバラ園で実現したいこと、さらにはその背景に存在する大久保さんの土地に対する強い想いが浮かび上がった。

※非構造化インタビュー： 質問項目を設けず、回答者の意識していない回答を引き出すことを目的とする質的調査方法

1. 懐かしい場所の提供による恩返し

大久保さんのバラ園を造園したいという考えは、ボランティアの方々に恩返しをしたいという気持ちに由来する。これまでに、NPO法人ふくしま再生の会所属のボランティアや研究者、また多くの学生が大久保さんの農地を訪れ、試験田での実験や除染作業等を行ってきた。福島や飯舘村、さらには自身の土地の復興のために精力的に活動する彼らに、大久保さんはお礼をしたいと願ったのである。自身に出来る恩返しを考えた結果、花園の造園を考えるようになった。というのも、大久保さんのバックグラウンドは農業と花卉栽培であり、その経験を活かしたいと考えたが、福島の土地ではお礼に農産物を作っても安心して食べてもらうことは出来ない。花卉であれば、十分に楽しんでもらえるはずだと考えたためだ。

花園のテーマは「10年後帰ってくる思い出の場所を作る」だ。大久保さんの考える恩返しとは、数年後ボランティアの方々が再び花園を訪れた際に、ボランティアの経験を思い出したり、家族や友人と楽しい時間を過ごしたりすることの出来る場所を提供することだ。土地を通して、思い出や楽しさを感じるという発想は、飯舘村民の大久保さんご自身が、土地の尊さや重要性を痛感しているからこそ、派生したものなのかもしれない。これまでは、大久保さん宅を訪れたボランティアの方々に桜の記念樹を植えてもらい、さらにそれぞれの樹に名前をつけてもらうことで、将来大久保さん宅を訪れた際に、自身の植えた桜がキレイに咲く姿を見ることが出来る、という取り組みを行っていた。今回のバラ園のデザインもこの活動の延長線上にあり、ボランティアの方々が今後再来した際に、精神的に豊かになれるような場所を作るということを目的としている。この想いがバラ園を造園しようと考えた根源であり、バラ園をデザインする際のコンセプトであるといえる。

以上が大久保さんがバラ園にかける想いである。これに加え、インタビューや文献調査を通して、「恩返しをしたい」という気持ちの背景には、生まれ育った土地への愛着が存在することが分かった。そして、土地の歴史やそこに内在する想いを発信することを大久保さんが強く望んでいるということが伺えた。そこで今回は、大久保さんから直接要請を受けた「恩返しを目的としたバラ園のデザイン」に加え、この土地に関する想いもコンセプトに加え、彼の望む歴史や想いを発信できるようなデザインも考案した。

2. 土地の歴史から想いを伝える

当初の大久保さんの依頼では、上のコンセプトのようなボランティアへの恩返しを軸としたバラ園のデザインを考えるものであった。そのもとで大久保さんのヒアリングを進めていくと、原発事故による影響の中でボランティアの存在に大きくフォーカスが当てられているようにみえたが、その話の中から私達はもう一つの重要な要素を抽出した。それは「背景の伝達」、つまり「土地の歴史に想いを乗せて伝えること」である。原発事故による影響を表やグラフでその変化を「見える化」するだけでは単なる普遍的な事実であって独自性が無く、大久保さんの花園で表現する必要性はない。そこで独自性＝大久保さんの「想い」という観点から話を見ていった結果、たどりついた答えは「土地の歴史を通じて各転換点での想いを伝える」ことであったのだ。開墾の苦難・野望、学生時代に毎日通った一本道、農業と減反政策を

機に始めた花卉産業、それらの積み重ねを理不尽に奪い取ったのが原発事故だった。その歴史があるからこそやるせなさ、悔しさを感じ、諦めかけていた時に支えとなり希望を見出してくれたボランティアや研究者たちに強い感謝の意を抱いているのだ。大久保さんの土地だからこそできる花園を作るためには、何より大久保さんの思いを反映した花園を作るためには、人生で共に歩んできた土地の歴史を伝えることが欠かせない。加えて、大久保さんの土地で今後もこういった活動が続いてほしいという意味も込め、「土地の歴史」には「未来」の要素まで含めている。

このような情報発信となるとターゲットはボランティアのみに絞らず、これから来る人全員に広げたものとなる。

以下の上記二つの「想い」を花園のコンセプトとし、それぞれの実現に資するデザインを考案した。二つのコンセプトの関連性を、以下のコンセプト概念図に記した。

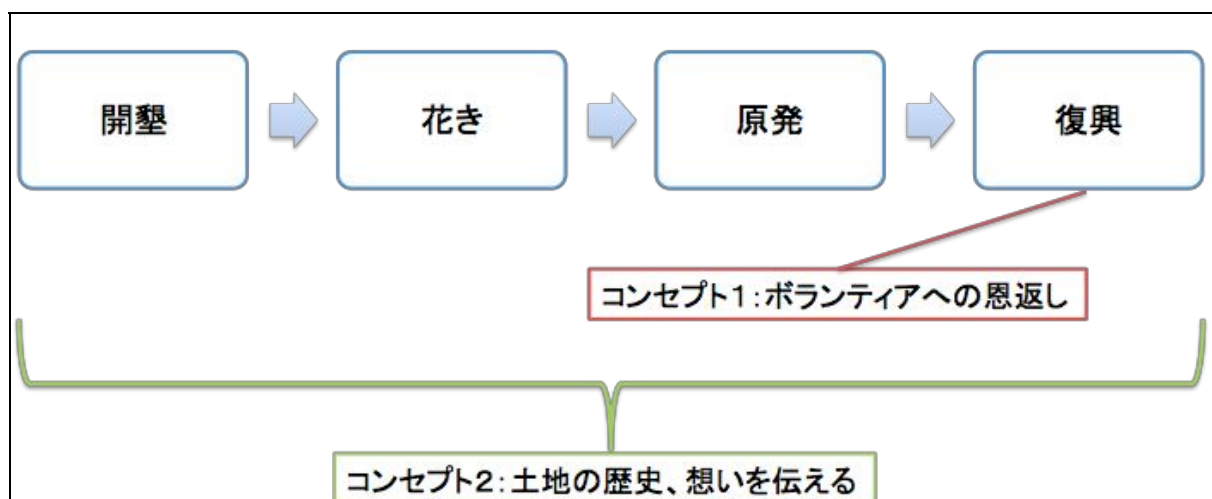


図3-1.1 コンセプト概念図(作成者：芝原)

4. 花園のアイデア

4-1 恩返し案

「ボランティアの人々が戻ってきた時に懐かしさを感じてもらえるような花園を作りたい」という大久保さんの想いを実現するため、我々が提案したバラ園のデザイン見取り図は図4-1.1である。

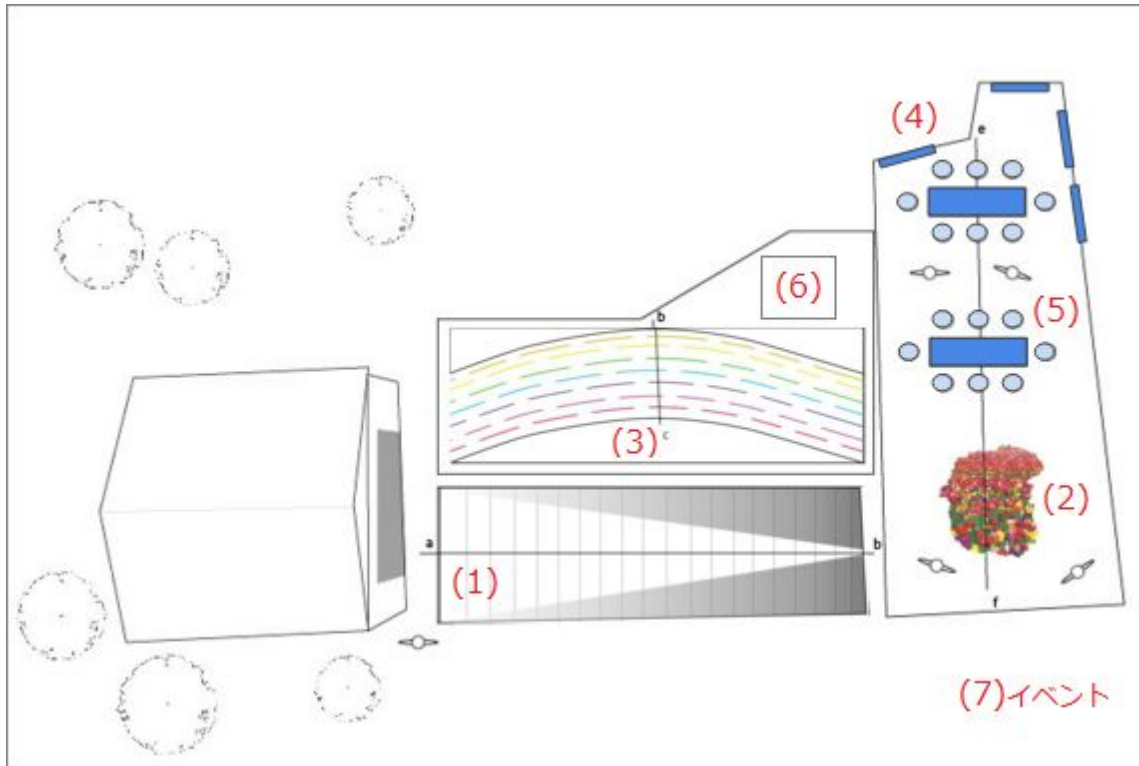


図4-1.1 バラ園全体の見取り図 (作成者:金子)

表3: 想定したターゲットの分類(作成者: 芝原)

バラ園完成前	バラ園完成後		5年後
○	→		○
	○	→	○

※○は来園のタイミングを表す

大久保さんの土地で既にボランティアを行った人の多くは、桜を皆で植える体験をしているため、次に来た時に再び桜を見て、大久保さんの土地でかつてボランティアをした経験や、一緒に桜を植えた経験を想起し、懐かしさを感じることが出来る(図4-1.2上側)。そのような人達だけでなく、今後大久保さんの土地を訪れる人に対しても再度訪れた時に懐かしさを感じてもらえるような仕組みを付与することをバラ園の役割と位置づけ、大久保さんの花園や飯館村のかつての様子を思わせる要素、桜と同様来園者自身が花を植えられる参加型花園の要素、自身が一度来たという足跡を残せる要素、人との会話を促す要素を盛り込んだデザインを作った(表3)。

我々の提案するバラ園の要素は7つあり、以下順に説明していく。

- 1) バラのトンネル
- 2) いいたて花壇
- 3) 香りの虹
- 4) 思い出の掲示板
- 5) 憩いの場
- 6) モニュメント
- 7) イベント

1) バラのトンネル

バラとアーチはよく用いられる組み合わせで、ここでは使えなくなったハウスの枠組みを利用し、バラのトンネルを作る(図4-1.3、4-1.4)。ハウスの枠組みを残すことで、震災前に農業が営まれていたこの土地のかつての姿を来園者に思わせる効果を狙う。また、入口(左側)付近は何も植えずに敢えて草を残しておき、出口(右側)に向かうにつれて、次第に花が増えていくデザインにする。進むにつれ華やいでいくトンネルを通じて、復興へ向かう飯館村の軌跡を表現する。

なお、12/6のプレゼンでは、大久保さんから「バラだけでなく他の色んな花も植えたい」という意見を頂いた。トンネルを彩る花は必ずしもバラである必要はなく、大久保さんの希望によって、例えば藤の花を咲かせても綺麗である(図4-1.5)。、アーチを全て花で覆わなくとも、風情のあるデザインとなる。トンネルは直線にすることで、奥に行くほど花が増えて行く様子を効果的に見せられ、肥料撒布などの管理作業も楽になる。

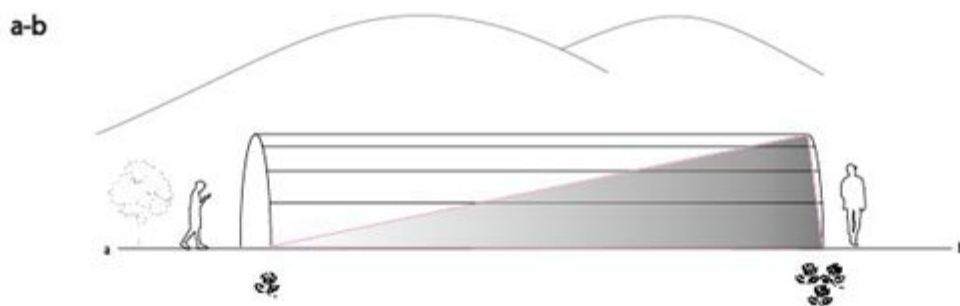


図4-1.2 バラのトンネルを横から見た図(作成者：金子)



図4-1.3 トンネルイメージ図(©SOZAING)



図4-1.4 藤の花のトンネル (河内農園 ©gazone)

2) いいたて花壇

バラのトンネルを抜けると視界が開け、目の前に飯館村を縁取ったバラの花壇が現れる(図4-1.6)。来園者にもバラを植えてもらい、次第に花壇がバラで溢れるようにする。これには「花咲く村いいた

て”を皆で作って復興になぞらえる狙いと、一度植えた来訪者が再訪した時に花壇を見て、自身が当時の経験を懐かしみ、より綺麗になった花壇を見て嬉しさを感じてほしいという狙いがある。



図4-1.5,6,7 いたて花壇イメージ図（左、右上、右下の順に5、6、7）
5-金子作成 6-週刊みとよほんまモンRadio Blog 7-駒型保育園HPより 引用

3) 香りの虹

ふくしま再生の会の方々が懐かしさを感じる要因を、ふくしま再生の会のホームページの中から探してみた。すると、以下のような“虹”の写真が掲載されていた。虹は次の世代へのかけ橋、自然との共生の象徴であり、ふくしま再生の会の果たす役割を表現するものとしてふくしま再生の会の報告会等でもこの虹が多用されていた。虹のデザインをバラ園の中に組み込むことでふくしま再生の会の方々が懐かしさを感じると判断し、デザインの中に取り入れることとした。そして、虹のデザインはバラ園内中央部に位置する(図4-1.5)。



図4-1.8 ふくしま再生の会 トップページ (URL:http://www.fukushima-saisei.jp/)

この虹のスペースでは視覚、嗅覚、味覚を通して、懐かしさや楽しさを感じてもらえるような特徴を組み込むこととした。視覚に関しては7種類の色の異なるバラを植え、虹のように見えるよう配置

し、鮮やかなデザインにする（図4-1.9）。次に嗅覚に関しては、7種類それぞれが異なる匂いを持つ品種を用いることとする（図4-1.10～12）。そうすることで、来園者により印象的な記憶を残させることができ、再訪した際には“懐かしさ”をより強く感じてもらうこともできる。最後に味覚に関しては、来園者が気に入ったバラの花びらを用いて、ローズティーを楽しめるような仕組みにすることとした。

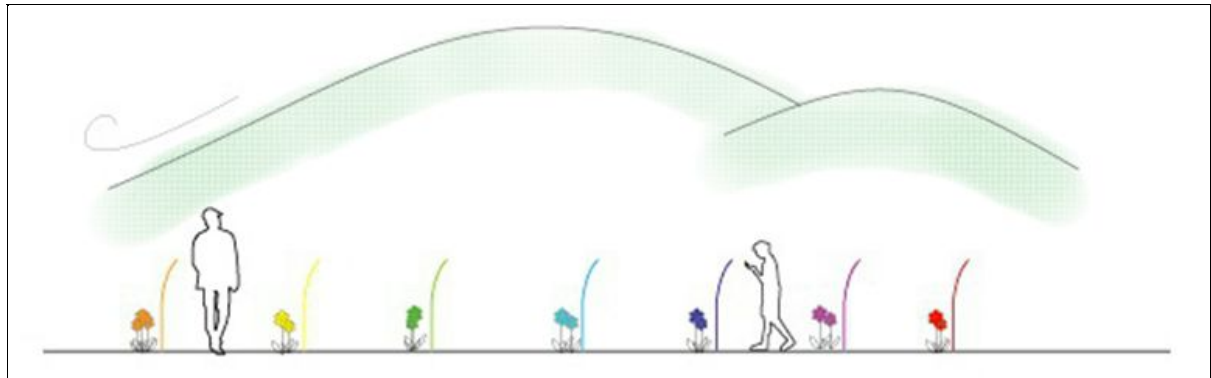


図4-1.9 虹のデザインを横から見た図（作成者：金子作成）



図4-1.10 香りの虹イメージ（<https://pixabay.com>）

GATAG.net



図4-1.11 香りの虹イメージ

<http://yado.co.jp/>



図4-1.12 香りの虹イメージ

芝原撮影

4) 掲示板

他にも“なつかしさ”を感じることでできるアイテムとして掲示板を考えた。掲示板はバラ園図4-1.1の右上に位置する。このバラ園での掲示板には二種類の情報を掲載する。一点目はふくしま再生の会のこれまでの調査結果や飯館村の復興の歩みなど、団体や村に関わる情報であり、二点目は来園者のコメントや大久保さんとの写真といった個人の思い出である(図4-1.13、14参照)。二点目に関しては、紙とペンを付近に用意しておき、来園者がバラ園の感想、大久保さんへのメッセージ、将来の抱負などを自由に書いたものを掲示板に貼っていく。こうすることで再訪した際に、昔の自分と対面することができ、かつ懐かしさを感じるきっかけとなる。原発事故後、多くの人が各々の想いを持ってバラ園を訪れたということも実感できる。そして、自身もその歴史の一部を担っていることを再認識し、充実した気持ちになる。この来園者の足跡が多くなればなるほど、大久保さんの喜びやモチベーションの向上にもつながる。



図4-1.13：来園者と大久保さんとの写真のイメージ
<http://bokete.jp/>



図4-1.14：掲示板のイメージ（絵馬の例）
<http://midekesain.com/>

5) 憩いの場

過去を思い出し懐かしく感じる上で、自分の言葉で過去について話をすることも効果的である。花園の中央には、腰を掛けて話が出来る憩いの場を設けた。ここでは、周囲に広がるバラ園や、そのさらに奥に広がる花園の景色を眺めながら、友人や他のボランティア経験者と、ゆっくり過去の体験や思いを話し、共有することができる。来園者同士の会話が活性化するように、テーブルを囲んでイスが並ぶような配置をとっている。またテーブルやイスも可動式のものをを用いることで、「来園者が輪になって相互に会話をする」という状態も作り出せる。さらに、イベント等の催しの際にも利用可能でもあり、様々な用途に対応できる。(図4-5.1,2)



図4-1.15 憩いの場イメージ図1
<http://seiseki.happy-town.net/>



図4-1.16 憩いの場イメージ図2
fr.dreamstime.com

6) モニュメント

花園にはモニュメントが見られることが多く(図4-6.2)、当バラ園においてもシンボルとなるようなモニュメントを配置することで、周囲のバラと調和しつつも異なる形態で、メッセージを届けられるようにした。モニュメントに用いるアイデアは多くあるが、12月6日の発表ではフレコンバッグを用いたアートへの反響が大きかった。フレコンバッグは放射性物質を含む土を詰めたものであり、処理場が見つからず現在も膨大な量が福島に土地に放置されている。(図4-6.2) ボランティアを経験した人なら誰もが「負のオブジェ」として捉えるものだ。そのような負の象徴であるフレコンバッグをアートに用いることで、原発を乗り越え、復興に向かう飯館村の様子を示し、来園者にも暗い印象を与えることなく、原発事故当時の様子やその後の復興の軌跡を伝えることができる。



図4-1.17 花園モニュメントイメージ (<http://iyashi.midb.jp/>)



図4-1.18 飯館村合宿で見たフレコンバッグの山(撮影：上田)

7) イベントの開催

上述したように、来園者に懐かしさや楽しさを感じてもらうためのデザイン案を6つ提案したが、デザインを考案する過程で、数年後いかにボランティア経験者をマキバノハノゾノに集めるか、という課題が浮かび上がった。ボランティアに尽力し密度の濃い時間を過ごした地ではあるとはいえ、交通の便の悪さや集客力の低さは否めず、数年後にどれほどの人を呼び戻すことができるのかという点が懸念された。

そこでこの課題の解決策として、数年後の春、マキバノハノゾノにてイベントを開催することを提案する。イベントであれば運営主体から招待を送ることができれば、多くのボランティア経験者に広く情報発信できる上、特別な催しと認識されるので集客率も上がることが期待される。さらに、同時に複数のボランティア経験者が集まることも想定される。共に花園を歩き、会話を通して当時を思い出すことで、懐かしく、楽しい時間を過ごすことができる。イベントの開催は大久保さんの想いの実現に大きく貢献すると考えられる。

以下にイベントの具体的な例をイメージ図とともに説明する。

・イベント例1 料理

イベントの具体例の1つとして、料理イベントを提案する。近年、料理のコミュニケーションツールとしての有用性が注目されており(図4-1.19,20)、マキバノハノゾノにおいても、料理によって会話が活性化することを狙いとした。また、福島で生産された農産物を用いることにより、福島の復興に向け尽力したボランティアの方々に対する「土地からの恩返し」を実現し、来園者にとっても意味のあるイベントとなることが期待される。より具体的な例として、芋煮会(図4-1.21)を提案する。芋煮会とは東北地方の伝統行事であり、東京においても芋煮会サークル(図4-1.22)があり、東北地方外の人々にも受けが良いようだ。1つの鍋を囲んで食事をするというスタイルもマキバノハノゾノのコンセプトとも合致している。

芋煮会と並行して、ローズティーを用いたお茶会も提案に加えた(図4-1.23)。先述した香りの虹では7種類の香りを用意している。来園者には好きな香りのバラのハナビラを摘んでもらい、そのハナビラを用いてローズティーを淹れ、味わってもらう。芋煮会とは打って変わって落ち着いて話をする場を提供することができる(図4-1.24)。



図4-1.19 料理イベントイメージ1
<http://baby.goo.ne.jp/rankingshare.jp>



図4-1.20 料理イベントイメージ2
<http://cocooking.jp/>



図4-1.21 芋煮



図4-1.22 芋煮会イメージ
(<http://www.agri.tohoku.ac.jp/douka/imoni/event-imoni2011.html>)



図4-1.23 ローズティー



図4-1.24 お茶会イメージ (bjx.jp)
(<http://ku-zou.blog.so-net.ne.jp/2010-09-01>)

・イベント例2 散策

別の有効なイベント例として、散策イベントが挙げられる。皆で集まり、花と山の自然に囲まれた花園を散策するという共通の体験をしながら、大久保さんの土地・飯舘村の歴史に触れ、皆で会話を

して楽しめることを期待している。

花園全体を散策する際、この土地における大久保さんの記憶や、震災・原発事故の記録、復興への道のりを知れる仕組みを設ける。詳細は4-2項に記述するが、花園全体にコースを設定し、開墾から震災を経て現在に至り、未来へ通じる土地の歴史を、アプリケーションや看板を活用して、来園者に伝えられるようにする。そういった学びを通して、花園へ来た記憶・印象を深めるとともに、かつて行ったボランティアの経験といった友人との共通の記憶や思い出を話の種にしつつ、花園を満喫して貰えると考えている。



図4-1.25 散策イメージ1



図4-1.26 散策イメージ2



図4-1.27 散策イメージ3

図4-1.25-27 上田撮影

4-2 園内ガイド案

上記の恩返し案は「懐かしい場所の提供による恩返し」というコンセプトに基づく、大久保さんの土地の中でもバラ園を対象としたアイデアであった。本案では「土地の歴史から想いを伝える」というコンセプトの下、土地全体を利用し、実際に花園を歩きまわること、土地の歴史や内在する想いを知る、というアイデアを提案する。また「3. コンセプト」で既述したように、当提案では、ターゲットを拡げ、再来するボランティアの方々だけでなく、初めての来園者(特に若い世代)も対象にしたアイデアとなっている。

以下の説明は、2015年12月6日に大久保さん方に提案したアイデアに、頂いたフィードバックを加味したものである。スケールも大きくICTを利用したものであり、大久保さんが考える範疇を超えた提案のため、大久保さんのやりたいこととのギャップ、つまりモチベーションの部分でのギャップが存在することが懸念された。しかし、発表後に「やるからにはここにしかない花園を作りたい」という言葉を大久保さんから直々に頂いた。新しい事へのチャレンジをポジティブに捉えていただき、私達も自信を持って本アイデアを推し進めることとなった。

(1) アプリケーション案

アプリケーション案は、

- 1 効果的な情報発信ツール
- 2 来園者参加型、双方向性の実現
- 3 集客のための楽しみ要素・話題性

といった3つの意義を持つ。情報を集約化できる事で利便性を増し、SNS等との連携によって広告することができる。さらに、来園者参加型の仕組みはアナログよりも遙かに容易になり、現場にいなくても参加できる仕組みも搭載可能となる。

本アプリケーションでは、GPS機能を用いた現在地がわかるマップを軸として、スポットに近づくと詳細情報が見られる電子案内板機能と来園者の参加型イベントの仕組みを搭載している。以下、実際の仕様画面のサンプルで基本的な機能を説明する。

1. アプリケーションの基本的な機能



図4-2.1 トップ画面(作成：上田)
マップ(作成：上田)



図4-2.2 案内
マップ(作成：上田)

◆1 案内マップ

GPS機能を用いることで現在地が反映されたマップと近づいたときにポップアップ機能により表示される電子案内板から構成される。電子案内板には音声ガイド機能が搭載されており、スポット名の横の「スピーカーアイコン」をタップすると、その場所や植物に関する音声ガイドを聞くことができる。花園内では基本的に「案内マップ」を利用していることとなる。



図4-2.3 案内マップからの詳細画面(作成：上田)

各スポットや植物のポップアップにある「詳細」をタップすると上の画像のような詳細情報が出てくる。ピンは色別に3種類に分かれている。

黄色： 大久保さんの思い出スポット

この花園の所有者、大久保金一さんの、この土地への思い出にまつわるスポットを紹介する。

青色： 植物の情報

この花園に生えている植物の生態やその植物にまつわるエピソード等の情報を紹介する。

赤色： 土地の歴史

この土地が開墾以来歩んできた道のりを、1開墾→2農業・花き産業→3原発による影響→4ボランティアと共に歩む 復活への道のり→5未来へのチャレンジ、に分けて紹介する。



図4-2.4 全体マップ(作成：上田)



図4-2.5 土地の歴史画面(作成：上田)

◆2 全体マップ

花園の全体の情報を一枚に集約した地図を表示する。

◆3 土地の歴史

大久保さんの土地の開墾以来の歴史を、前記「1.開墾、2.農業・花き産業、3.原発による影響、4.ボランティアと共に歩む復興への道のり、5.未来へのチャレンジ」の5つのターニングポイントを設定し、それぞれの詳細な情報を写真と文字で表現したページを表示する。図4-2.5の左画面で好きな項目をタップすれば一発でその情報に飛ぶことができる。

◆4 いいたて花壇

4-1(2)で紹介されている「いいたて花壇」の参加ページを表示する。

以上がアプリケーションが持つ基本的な機能の説明である。続いて、花園内にコース取りされた各ゾーンでの具体的な内容について説明していく。

2. 全体像

土地の歴史から各ターニングポイントにおける大久保さんの想いを伝えるために、花園内にコース作りをする事にした。この土地が開墾以来歩んできた道のりを時系列に沿って、

- ① 開墾
- ② 農業・花卉産業
- ③ 原発による影響
- ④ ボランティアと共に歩む道のり
- ⑤ 未来へのチャレンジ

の5つのゾーンに分けて花園全体に順路を作る。コースは次ページの図4-2.6の通りである。

コース作りをする意義としては2点ある。1点目は「わかりやすさ」である。時系列に沿って歴史を知ること、その出来事が起きるまでの経緯を常に時間軸に知って整理された状態で理解することができるため、その時々のおもいを伝えるためには非常に効果的な方法である。そして、2点目は「花園全体を歩いてもらえる」ことである。この花園内に上記5つのゾーン以外の要素として、大久保さんの個人的な思い出スポットを情報として組み込んでいく。(例えば学生時代に学校に行くのに毎日使った一本道や5年前程に大久保さんが自作した石アート等、ピックアップしたいスポットが何か所か存在する。)そこも含めて、花園全体には見せたいところが散在しているため、コースを設定することでもれなく見てもらうことができるのだ。

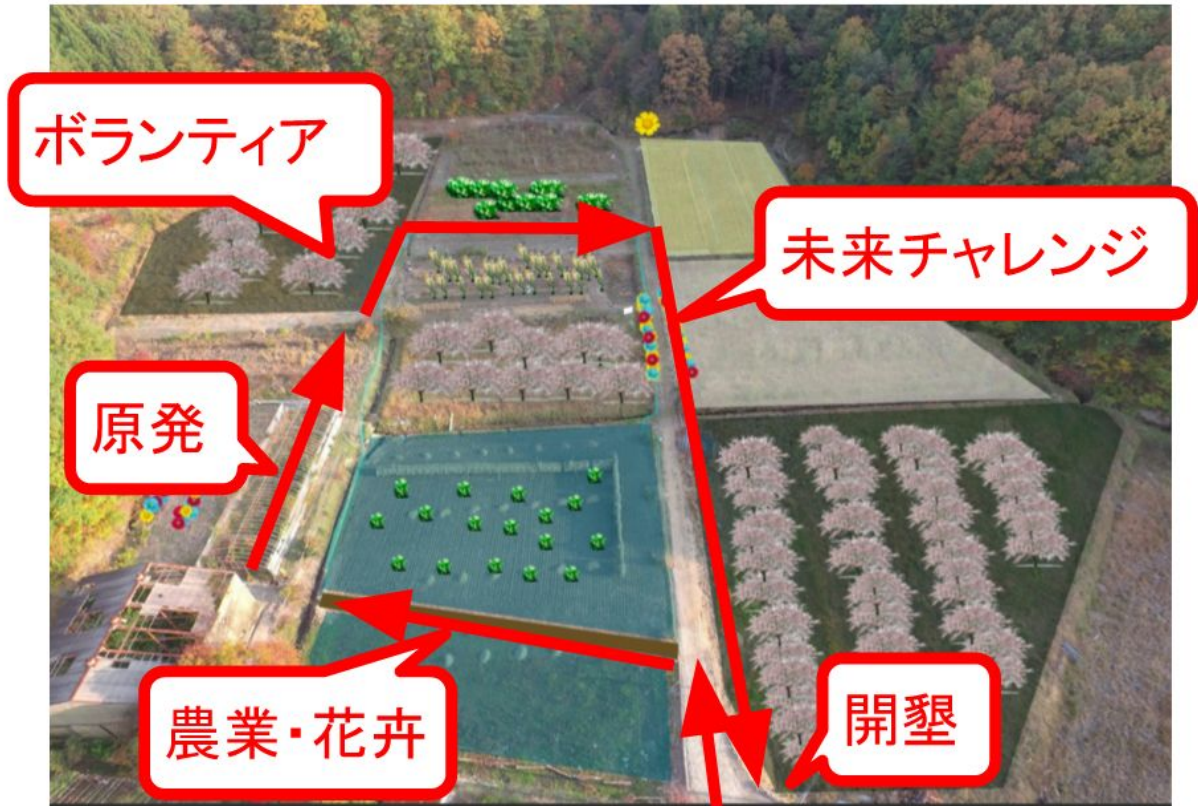


図4-2. 6 全体のコース概観(撮影：金子)

各ゾーンでは、そこで伝えたいことを基に①事実を写真や文字で表現する②花園内の土地を使って表現する、という2種類の方法を使って表現している。その情報伝達手段として、私たちは①アプリケーションを開発し用いる②パンフレットを作成するという2つの案を考えた(図4-2.7)。基本的に来園者にはアプリケーションを用いて花園を回って頂き、パンフレットはデバイスを持っていない高齢者を中心とした方々のためのものとして作成する。そのため、これから説明する5つのゾーンの具体的な内容については、実際にアプリケーションを使っている目線で紹介していく。

1パンフレットの作成

2アプリケーションの開発

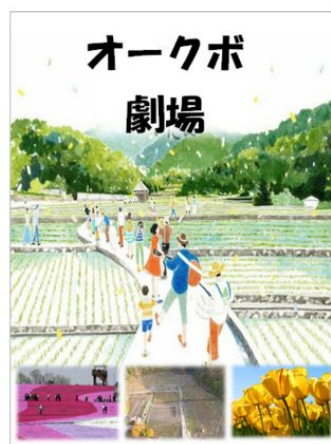


図4-2.7 情報伝達手段(作成：上田)

※パンフレットはイメージであり、実物のデザインは今後作成していく。
 ※パンフレット→背景：「風が吹いてきたよ2015～小豆島・肥土山音楽祭」ポスターより引用

3. 各ゾーンの内容

① 開墾

開墾当時の苦難や希望を文字と写真を使って表現する。

「一人では手が回らないくらいの大木がいっぱいあり、枝も広がっていた。その1本1本を、父は山仕事用のノコギリで切り倒し、根が腐るのを待って掘り起し、万能で畑にしていって。チェーンソーが登場する前の時代のことだ。俺も手伝ったが、大変な作業だった」(「海よ里よ、いつの日に還る」より)というような大久保さんのリアルな言葉を最大限反映させる形にしていく。



図4-2.8 開墾ゾーンの案内マップ(作成：上田)



図4-2.9 開墾ゾーンの情

報伝達例(作成：上田)

② 農業・花き産業

このゾーンでは開墾以来、農業を始めコメを中心に作り続けていた矢先に国によって減反政策が施行され、減収となった。その中で活路を見出そうと花き産業への取り組みを始めた。当時の気持ちは「頑張たくさん作ろうとしたら国が減反政策を始めた。『コメを作れ、作れ』と言っておきながら。国のやることは間違っばかりだったよ。その時から俺は、国への信頼をなくしたんだ。」(「海よ里よ、いつの日に還る」より)という言葉からも推測できるように、減反政策が1つのキーになっていると考え、そこを境に作るものを変えた状態を表現する。表現方法としては上記のように文字と写真を用いるほかに、道の左右にそれぞれ花・農作物(コメ)を植えて減反前後での作っていたものの再現を図る。

道の左右で表現(減反政策を境目)



図4-2.10 減反政策による変化を実際のフィールドで表現(作成：上田)

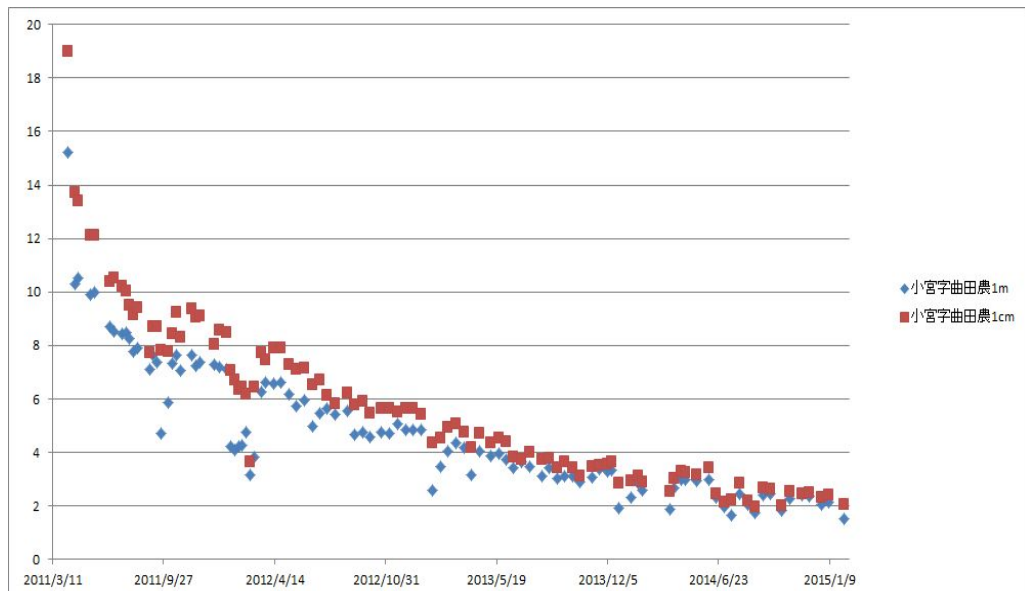
③ 原発による影響

開墾以来のこれまでの土地に対する想いの積み重ねが非常に理不尽な形で突如として奪い取られてしまった、その元凶こそが震災による原発事故であった。大久保さん自身、とてつもなく悔しくやるせない思いをしたという。しかし、当事者でない人にとってはどんなバックグラウンドがあって原発によって何が変わってしまったのか、抽象的な形としてでしか感じられないものである。そこで、一番伝わるものとして原発による事故前後の「変化」に着目し、かつ大久保さんが実際に関係しているものに絞って情報を発信していくことが重要になってくる。やはり、大久保さんの土地だからこそできる事を追求することこそが花園の意義を深めるため、何が何でも目に見える形で提示できるデータを出せば良いというものではない。①データが見つけれられるもの、かつ②大久保さんに関係している事象であるという基準の下、原発による変化として以下の要素を取り上げる。

(a) 線量

空間線量/土壤中の線量

例) 表4-2.1 飯館村小宮での空間線量の推移



引用：ふくしま再生の会HP (<http://www.fukushima-saisei.jp/mon/trendiitate/#05>)

(b) 人

人の移動先/家族構成/収入/支出の割合/暮らし(体験談)/病気(介護の必要性)

例) 仮設住宅での生活における精神的なストレスによるうつ病の発症や認知症の進行
 例) 表4-2.2 飯館村からの避難先—2015年12月1日現在

2015-12-01現在の避難情報

県外避難者数		
都道府県名	避難人数	避難戸数
1 北海道	39	18
2 青森県	4	2
3 岩手県	3	1
4 宮城県	59	39
5 秋田県	9	2
6 山形県	29	10
7 茨城県	17	13
8 栃木県	46	25
9 群馬県	9	6
10 埼玉県	76	40
11 千葉県	31	23
12 東京都	62	47
13 神奈川県	60	38
14 新潟県	19	7
15 山梨県	3	3
16 長野県	3	3
17 岐阜県	1	1
18 静岡県	11	5
19 愛知県	1	1
20 三重県	6	1
21 京都府	9	1
22 大阪府	2	2
23 岡山県	5	2
24 広島県	6	2
25 徳島県	1	1
26 佐賀県	1	1
27 大分県	1	1
28 鹿児島県	1	1
29 沖縄県	2	2
30 海外	4	4
県外計	512	302
不明	1	1

県内避難者数		
自治体名	避難人数	避難戸数
1 福島市	3,880	1,628
2 会津若松市	22	8
3 郡山市	69	43
4 いわき市	16	14
5 白河市	1	1
6 須賀川市	6	2
7 喜多方市	15	5
8 相馬市	423	198
9 二本松市	79	35
10 田村市	17	8
11 南相馬市	410	199
12 伊達市	581	283
13 本宮市	12	7
14 桑折町	6	3
15 国富町	59	28
16 川原町	907	203
17 大玉村	14	3
18 鎌田町	4	3
19 天栄村	1	1
20 下郷町	2	2
21 南会津町	1	1
22 北会津町	1	1
23 檜杵町	9	3
24 三島町	1	1
25 滝澤町	1	1
26 西郷村	6	2
27 中郷村	6	1
28 生吹町	1	1
29 玉川村	2	2
30 三春町	5	2
31 小野町	5	4
32 広野町	1	1
33 磐梯町	9	6
県内小計	6,174	2,700
飯館村内	52	49
県内合計	6,226	2,749
全合計	6,738	3,052

県内施設別避難者数 仮設住宅		
施設名	避難人数	避難戸数
1 伊達市仮設住宅	142	89
2 田村市仮設住宅	68	31
3 田村市仮設住宅	44	23
4 国富・大玉戸仮設住宅	15	7
5 国富・上郷仮設住宅	36	17
6 田村市第一仮設住宅	176	105
7 田村市第二仮設住宅	167	92
8 田村市仮設住宅	35	28
9 福島市天野青葉の仮設住宅	267	138
仮設合計	970	530

各施設		
施設名	避難人数	避難戸数
1 公共施設	336	131
2 借上住宅	2,654	1,231
3 いいてまへ	39	39
合計	3,029	1,401

施設合計	
避難人数	避難戸数
3,999	1,931

未避難	
未避難人数	未避難戸数
13	10

引用：飯館村HP (<http://www.vill.iitate.fukushima.jp/saigai/?p=8445>)

(c) 景観

フレコンバック/はげ山(切り取られた山)



図4-2.11 行き場の決まっていないフレコンバック(撮影：上田)



図4-2.12 客土用に切り崩されていく山(撮影：上田)

この中で特に着目したい点が「暮らしぶりの変化」や「心の病」、「壊れた地域のきずな」等の、明確にデータでは「見えない部分」である。「作られた生活の中で、見えないものとの闘いをしているんだ。」これは、ふくしま再生の会副理事長の菅野宗夫さんがおっしゃっていた言葉である。放射線や風評被害、コミュニティの崩壊、これらのような目には見えないものと闘う毎日は、先行きが見えず、国や役場も明確な未来を提示してくれるわけではない。避難解除になるのはもうすぐ2017年3月からだというが、新たな生活がスタートできる準備などできていない。農地を犠牲にして仰々しく並びそびえ立つフレコンバックの行きさえ決まっていないのだ。そのような中で生きていく日々は心に重くのしかかり、大きなストレスとなって人の何かを狂わせていく。だからこそ「見えないものと闘い続ける苦しさ」を強く発信していくべき要素ではないかと考える。

④ ボランティアと共に歩む復活への道のり

大久保氏がこの土地を通じて最も“恩返し”をしたい相手は震災飯館村の為に奮起したボランティアの方々である。それはボランティアの研究の成果が復興への希望の光になっていたからだ。その想いを形にする為に数年前に記念樹として桜を植樹した。桜一本一本に両者の想いが詰まっている。桜に関わった人たちがこれから何十年後にこの土地に足を踏み入れた時に、もう一度震災後の気持ち“懐かしさ”が蘇るよう、アプリケーションを通じて当時の気持ちと顔写真を見る事が出来るようになっている。そのアプリケーション作成の手順としては以下の図に詳細がある。



図4-2.13 記念桜の写真・メッセージ入力画面(作成：金子)

- (a) 植樹に関与した方々にメッセージが届く。
- (b) URLに飛ぶとメッセージと写真を登録できる。
- (c) メッセージと写真がアプリケーション内に掲載される。

また、その桜が満開に咲いた時、その桜の下で関わってくれた人々と飯館村のお米で作ったお酒を飲む事が大久保氏の夢である。

⑤ 未来へのチャレンジ

未来につながる要素として2つのアイデアを提示する。

(a) オープンスペース

開墾以来大久保さんは常に挑戦し、その過程で幾つもの困難も乗り越えてきた。原発事故により奪われた土地に茫然自失し諦めかけていた時に表れた希望の光、ボランティアの存在と共に、原発事故さえも乗り越えようとしている。そんな大久保さんの生き様を表現できる、自らが以前同様に挑戦できる“夢”や“希望”がたくさん詰まったスペースを“未来へのチャレンジ”と名付けて残す。まだまだ人生は終わっていない。今ある希望の光を、そして未来で新しく輝きを放つ挑戦の意志を、是非とも大久保さんの手で花園の中に形あるものとして作り上げていってほしい。その願いを込めたスペースとして、かつ大久保さんの意志のありかとしてオープンスペースを設置する。大久保さんの挑戦とともにこの空間は進化していき、そして人々を巻き込み感動させていくであろう。私達がそうであった様に。

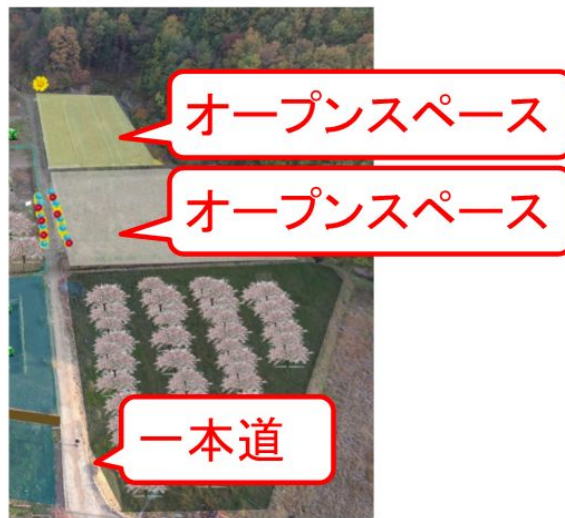


図4-2.14 オープンスペース周辺の案内図(作成：上田)

図4-2.15 オープンスペースの位置(作成：上田)

(b) いいたて花壇

4-1(2)で紹介されている「いいたて花壇」である。いいたて花壇は前述したように、花咲く飯館村を皆で作り、復興になぞらえる狙いと、一度植えた来訪者が再度来た時に花壇を見て、自身が花を植えた経験を懐かしみ、より綺麗になった花壇を見て嬉しさを感じてほしいという狙いがある。つまり今まで来たボランティアだけでなく、これから来る人こそ正しくターゲットとなっているのである。また、何よりも来園者の無数の笑顔の画像を見ることで大久保さんのモチベーションにも大きく寄与するところだと考えている。この仕組みはアプリケーション内の機能を使うことで来園者参加型の双方向性を持ったものとなる。ここではその仕組みについて説明する。

①まず、トップ画面の「いいたて花壇」あるいは案内マップでのポップアップ「いいたて花壇＞詳細」をタップする。



図4-2.16 トップ画面(作成：上田)

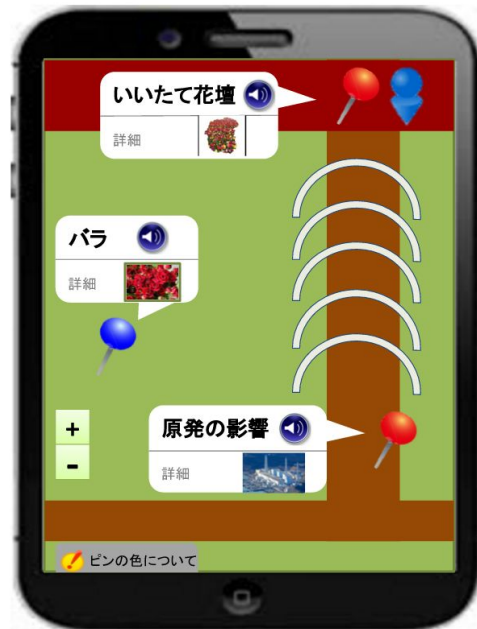


図4-2.17 案内マップ画面(作

成：上田)

②以下のような「いいたて花壇」のトップ画面が出てくるので「笑顔を登録する」をタップすると、写真とメッセージを入力できる画面につながる。因みにトップ画面には、定点カメラで常に観測することにより、リアルタイムでの「いいたて花壇」の様子を映し出すことに成功している。

②写真とメッセージの入力画面



現在のいいたて花壇の様子

※定点カメラを使用



図4-2.18 「いいたて花壇」トップ画面(作成：金子)
ブ画面(作成：金子)

図4-2.19 案内マッ

③入力完了後、「いいたて花壇」の中で自分が植えたゾーンをタップすると、そこに画像が反映される。そして「いいたて花壇」の最初の画面に戻り「みんなの笑顔を見る」をタッ

プすることで、今まで花を植えた人の笑顔の画像が出てくると共に、下部では投稿されたメッセージがランダムに流れる画面を見ることが出来る。

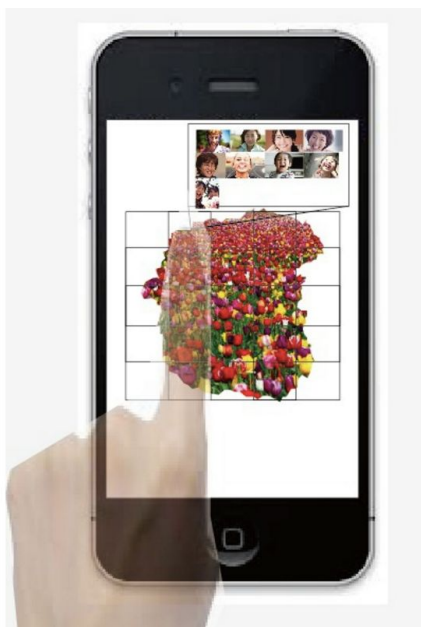


図4-2.20 自分が植えたゾーンをタップ(作成：金子)

(作成：金子)



図4-2.21 みんなの笑顔とメッセージ

(2)パンフレット案

この節で用いているパンフレットの中身に関する画像はあくまでイメージであり、実物は自分達でイラスト・デザインしたものを作成することをあらかじめご了承ください。

1.パンフレットの位置づけ

既述したように、大久保さん方に対するプレゼンテーションの結果、タブレット端末を用いたアプリケーションを主に用いる運びとなったが、パンフレットもアプリケーションに付随する形で残した方がいいという意見をいただいた。デジタル端末を所持していない方だけでなく、端末のバッテリーが消耗した、紙媒体の方が目の負担が少ない、アプリケーションに何らかの問題が生じた、などのトラブルを想定し、希望者に手に取っていただけるものとする。

2.パンフレットの仕様

内容は原則としてアプリケーション案と同一である。したがってここではパンフレットの仕様について説明する。内容については前項を参照していただきたい。

まずは図4-2.22:パンフレットの構造を用いてパンフレットのつくりについて説明する。表紙を開くと2ページにわたり花園の全体図(マップ)を参照することができる。さらに両側に観音開きのように開くことができ、大久保さんと土地の歴史についての情報を閲覧できる。以下、それぞれのページについて説明する。

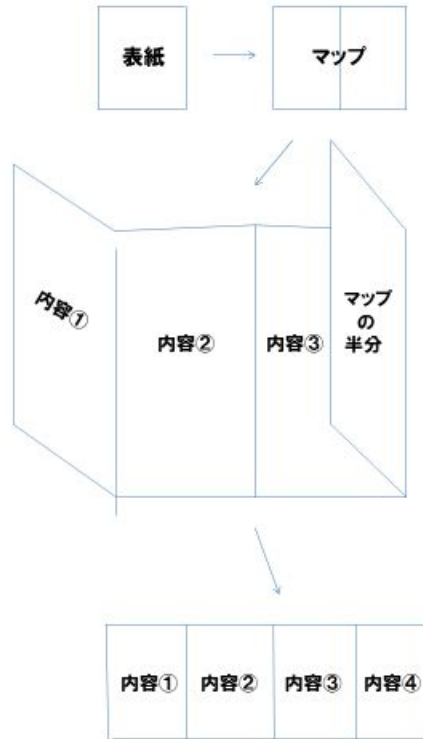


図4-2.22 パンフレットの構造(作成：上田)

○表紙

表紙にはアプリケーションと共通のタイトルをつけ、大久保さんの理想の花園をイメージしてデザインする（図4-2.23）。



図4-2.23 表紙イメージ(作成：上田)
※引用等については図4-2.7と同じ

○全体マップ

全体図は大久保さんの花園全体が把握できるようにする。花の種類や大久保さんと土地の歴史についての情報、大久保さんの思い出などのスポットを一目見て分かるように記す（図4-2.24）。



図4-2.24 全体マップイメージ(http://blog.livedoor.jp/genki_119/archives/51044068.htmlより引用)
※上記はイメージで、実物の全体マップでは自分達が作成したイラスト・デザインの地図を用いる。

○土地の歴史

内容は土地の歴史について写真や図、グラフを載せ説明文を添える。（詳しくは（1）アプリケーション案2. 全体像を参照。）来園者には、実際に花園を散策しながら大久保さんの土地の歴史を体験していただく（図4-2.24）。



図4-2.24 土地の歴史イメージ(作成：上田)

○裏表紙

ここでは来園者が帰宅後もいいたて花壇など、マキバノハナゾノの情報を得られるようにホームページアドレスを記載する。あるいはQRコードを添付し、スマートフォンやタブレット端末でホームページにアクセスできるようにする(図4-2.25)。

花アート！
自分の植えた場所に印をつけておこう！

現在の花アートは下記HPからチェック！
<http://www.mantis.co.aji/flower-art/>

またの御来場をお待ちしております。

図4-2.25 裏表紙イメージ(作成：上田)

5. 維持管理における課題と解決案

花園のアイデアとは別に資金調達・作業人員・広報戦略に課題がある。それらの解決策を以下に提示する。

5-1. 資金調達

花園のアイデアを実行するにあたり、資金源の問題が生じる。そこで、飯館村が計画をまとめた「いいたてまでいな復興計画(第5版)」を参考にすることとした。そこでの資金面の援助として「陽はまた昇る基金」というものが紹介されていた。この基金では、東日本大震災による原発事故災害からの復興に向けて、住民生活の安定や地域産業の再生など、復興の実情に応じたきめ細やかな取り組みを支援することを目的としている。その対象は、村民個人及び村民が中心となって構成する団体、村内企業・商店等の事業主、その他村が行う復興事業である。“基金”とは一般的に事業などの財産的な基礎となる資金のことを指すが、これは返済する義務があるものなのか確認する必要がある。

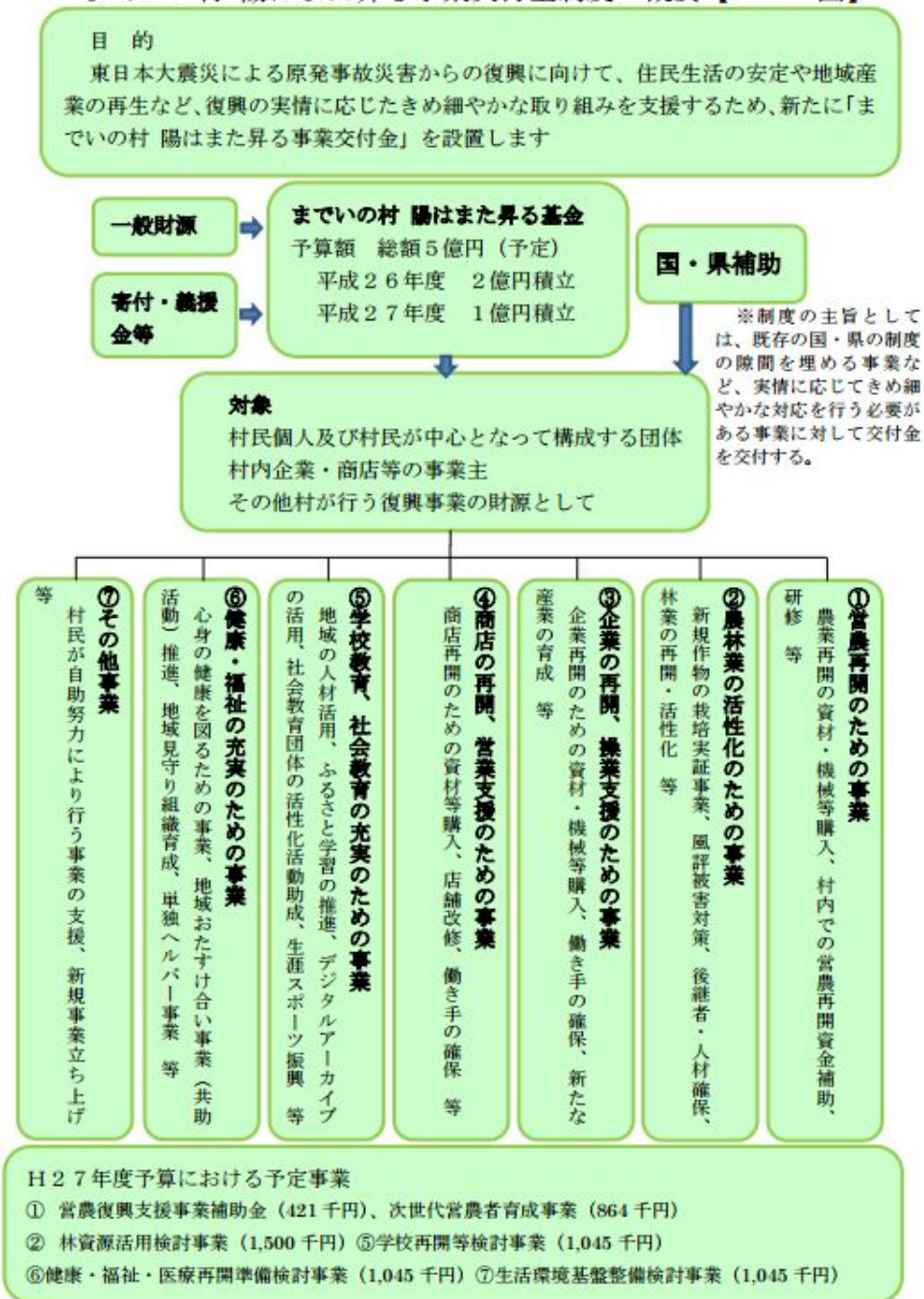


図5-1.1 陽はまた昇る基金 フロー図

(URL:<http://www.vill.iitate.fukushima.jp/saigai/wp-content/uploads/2015/05/6f7995d3bdda4b69be489a99522a70e6.pdf>)

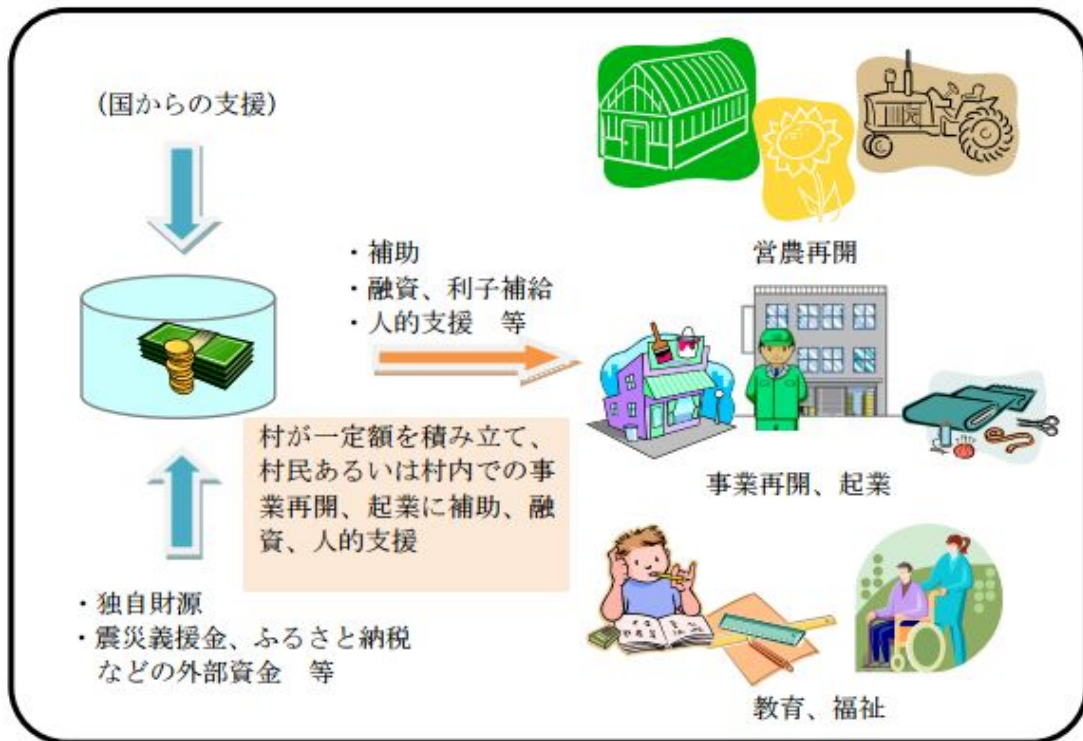


図5-1.2 陽はまた昇る基金 イメージ図

(URL:<http://www.vill.iitate.fukushima.jp/saigai/wp-content/uploads/2015/05/6f7995d3bdda4b69be489a99522a70e6.pdf>)

5-2. 作業人員

園内のガイドや花園のデザインに関する案があってもそれを実行する人、そして維持管理をする人がいなければ、このプランは潰れてしまう。実行に関してはITの知識を要することや園内の規模自体も大きいことから、大久保さん(75歳)が1人では難しい。そのため、我々が行う、もしくは次年度の特論I 飯館班が行う、ふくしま再生の会にお願いするということも可能ではある。しかし、維持管理に至っては我々やその他の方々もが行い続けるということはおそらく困難である。そこで、“地域おこしインターンシップ制度”を維持管理の解決策として考えた。この制度は、大久保さんの土地でプランの実行や維持管理を解決できるだけではなく、担い手の問題解決や避難先で営農・飲食店などの経営を再開している人たちと村とのつながりを保つことにも繋がります。この内容は付録に示すこととする。

5-3. 広報戦略

(1) 概要

飯館村はその規模や場所の問題から福島県外の人々からはあまり知られていない。そのため、私たちの意図するように「マキバノハナゾノ計画」を機能させるためには、いくつかの広報戦略を立てることが重要となる。この節ではターゲットの再確認と共に、各ターゲットに対して考え得る広報戦略を提示する。

(2) 広報戦略

本計画における広報戦略を進める上での目標を2つ定めた。こうすることで全てのことを同時にカバーするよりも、各目標に対して明確な施策を練ることができる。主な目標としては以下の2つが挙げられる。

1. 「マキバノハナゾノ」に人々を惹きつけること
2. 花園に関する情報を広めること

(3) ターゲット

本計画における主要なターゲットは福島県あるいは飯舘村に所縁のある人々である。例えば、以前飯舘村あるいは福島県に住んでいた人々であり、ボランティアとして大久保さんの元を訪れたことがある人々だ。無論、現在除染作業に取り組む作業員や飯舘村民も含まれる。そこには大きく2つの理由がある。一つ目は、もはや最優先で飯舘を訪れることを考えてもらえるくらいに、飯舘村は早急に知られる必要があるからである。いかに素晴らしいアイデアであろうとも、人々が知らなければ全ての努力は何の役にも立たない。そこで、私たちは飯舘の良い情報を発信していく際には費用対効果の大きい方法をとらなければならない。福島第一原発事故に直接関係した人や強く関心を持つ人のサポートを頂くことは非常に容易な方法である。一度サポートを受けることができれば、接点のなかった人々に情報を届けることがはるかに簡単なものとなる。二つ目は、大久保さんへのインタビューや会話の中で、彼の「夢」が日本人に対して発信していきたいものであったからであり、大久保さんの意志を第一に尊重する本計画では最優先で日本人をターゲットにすることは明らかである。そこで、飯舘村民、村民以外、海外の3つに分けて、広報する方法を考えることとする。

(4) 施策

(a) 村民

まず、飯舘村民へは村が発行する「広報いいたて」という広報誌に掲載を依頼する。この広報誌は毎月1冊発行される。これには村内での動きを把握するために、多くの村民が目を通している。この広報誌は昨年、内閣総理大臣賞を受賞しているため、無料配布であるにもかかわらず、内容も充実している。次に村民以外に周知する方法として、福島県内のTV局や新聞社、国内でも大手のTV局や新聞社に依頼する。飯舘村はすでに原発事故の被災地として日本だけでなく、世界的にもその名が知れ渡っている。これまでに数多くのメディアの参入があり、メディア側にもネタになるため依頼し、取材していただくことは容易である。

(a)の村民とは対照的に、(b)(c)でのターゲットは地理的に非常に広く分散している。このような広範囲に対して情報発信をする上では、ITの活用が非常に有効的だと考えられる。IT関連のサービスは多様化が進んでいるため、(b)(c)では日本やその他の国々において利用率の高いITサービス、つまりは情報発信効率が高いと考えられるサービスをリスト化した。

(b) 村民以外(日本&東南アジア諸国)

続いてのターゲットは日本国内での飯舘村民以外の人々であるが、ここでその他アジア諸国も含めたのは、その広報戦略方法が村民以外のターゲットへのものと同じであるからだ。産業が発展し高度な情報技術を持つ日本で使われるメディアの流行に、東南アジア諸国が追随しようとしていることは周知の事実であり、それ故広報戦略方法を同じものとした。日本で使われる上位のメディアは以下の4つである。

1. [Line](#)
2. [Twitter](#)
3. [Facebook](#)
4. [Yahoo news](#)

(c) 海外(上記以外の国々)

アジア諸国以外の国々では、欧米の流行が取り入れられることが多い。既述した日本を含むアジア諸国以外の国々で多用されるメディアは以下のとおりである。

1. [Facebook: BuzzFeed, messenger, pages.](#)
2. [Google: youtube, pages, Search, Profiles.](#)
3. [9gag.](#)
4. [Twitter.](#)

(d) 結論

村民に対しては「広報いいたて」という非常に影響力の高い情報発信の手段が存在するのに対し、非村民や国外の人々に対する有効な広報手段は存在しないのが現状だ。調査の結果、日本を含む多くの国々でLine, Twitter, Facebookが利用されており、これらの有効活用が情報を広く・深く浸透させる上で重要であろう。現状としてLineにおいては不特定多数に対する情報発信をすることは出来ない。そこで、今回は広報いいたてに加え、FacebookとTwitterを用いた情報発信を主な施策として提案したい。

(5) 非デジタル施策

情報発信の効率という観点から、(4)ではIT焦点を当てた施策を提案した。しかし、情報拡散の効率こそ低いものの、取り組みの敷居が低いアナログの広報手段は広報戦略の第一歩となる。上述した「広報いいて」の活用は1つの例と言える。そこで一つ、イベントの開催というデジタルな施策として「農業体験教室の開催」を提案することとする。

広報の場として、地域／関東の中学校や高校で農業体験の場を設けるのはどうだろうか。スマートフォンの急速な普及により、近年の若者の社会的つながりは「デジタル化」されている。デジタル化に伴うつながりの希薄化や不可視化が危惧されるのも耳にして久しい。そういった若者にとって、農業を通して伝わる他者や自然、環境との有機的な繋がりは意味の有ることだと言えるだろう。このような、若者に強い影響を与えるであろう場で情報発信することにより、情報の浸透力を高めることができ、「意味のある広報」の実現が可能になるのではないだろうか。

6. 今後の方針

6-1. アイディアのブラッシュアップ

本プロジェクトは農学国際特論Ⅰのグループワーク、およびGCLワークショッププログラムの一環であるが、提案したアイディアを実現するためには本講義を超えた長期的な作業が必要である。我々はアイディアを提供し、大久保さんに認めていただいたのであるから、本講義での発表、および報告書提出後も何らかの形で「マキバノハナゾノ計画」に携わってゆく責務がある。第5章で述べた課題への解決に向けてアイディアをより一層ブラッシュアップする必要がある。

6-2. 大久保さんとの話し合い継続

「マキバノハナゾノ計画」は大久保さんの土地で、大久保さんの夢を実現するお手伝いであり、大久保さんの思いに適ったものを作りたいというのが我々の意思である。大久保さんの夢の実現に向けて、話し合いを継続し、意見交換を行いたいと思う。話し合いの中から良いものが生まれると我々は信じている。

6-3. バラ園づくり

本プロジェクトの目的は、大久保さんへのアイディアの提供であったが、「マキバノハナゾノ計画」のコンセプトは「誰もが忘れられないような花の景色を作ること」である。アイディアの提示、話し合いにとどまらず、作業を手伝うこともまた重要である。メンバーの多くは実際大久保さんと1、2回ほどしかお会いしていない。話し合いや花の管理を通じて大久保さんとのきずなを深めることが第一である。まだまだ花園内の大久保さんの思い出のあるスポットは存在するため、花園を大久保さんに案内してもらいながら散策するのも良い。我々の手が少しでも大久保さんの力になれることを願う。

6-4. アプリの試作品開発

アプリの使用に大きな興味を抱いていたため、大久保さんによりリアルなものを提示して話を建設的に進めていくために試作品の開発を7月を目途に成し遂げたい。そのためには、そもそもチームの中にアプリ開発のスキルを持っているメンバーがいないため、開発スキルを持った協力者を探すことが直近の課題である。また、Wifiは受信できていたのだが、GPSが花園内のどこの場所でも機能するかどうかや正確性の確認をしなければならない。

7. 個人の感想

○石渡 尚之 国際情報農学研究室

今回の特論1のクラスは農学国際専攻のクラスである「特論I」であるとともに、東京大学ソーシャルICTグローバルクリエイティブリーダー育成プログラム（GCL）のコース生にとってはコースワークであるグローバルデザインワークショップB（GDWSB）でもありました。また私にとっては実際にワークショップを運営するGDWSCであった。実際にグループワークを進行させるというのは想いの他難しいものでした。これまで学部や修士課程の中で合宿を組み込んだクラスと言うのはいくつか受けてきましたが、まさにそれは「業を受ける」というもので用意されたコースに乗っていただければよかったものでした。しかし今回は「業を授ける」側にまわることでこれまで見えていなかった大変さを知ることができて大変ありがたい経験であったと思います。授業から授業へ、といっても自分には授けるほどの業もないので、グループメンバーの会議をサポートするぐらいしかできませんでした。しかし各々のメンバーがそれぞれのバックグラウンドを場に提供してくれたおかげで本ワークショップの成果は大変良いものになったと思っております。本ワークショップのメンバーはひとりひとりが熱量をもってこちらの設定したテーマに取り組んでくれました。その点で私はグループメンバーに非常に恵まれたと感じております。最初こそテーマはこちらが設定したものではありませんでしたが、メンバーの熱量に当てられていつしかテーマは当初の目的は踏まえつつ彼ら自身の中へと移っていったように思います。おかげさまでこのワークショップ期間が終了したのちも続けてこのマキバノハナゾノプロジェクトに関わりたくてくれるメンバーもおります。また土地の所有者である大久保金一さんも私たちの提案したデザインを実現させるように協力して下さると思います。まさにグループワークを主体とし、現実世界に影響を与えるということの第一歩であったと思います。

○佐藤 聡太 国際情報農学研究室

この授業でグループが決まってから毎週2回ミーティングを行ってきた。他のことが何も手につかないくらい毎日の授業に費やしてきた。これまでの授業とはインターネットや先生からいただいた文献でレポートを書いていたのだが、この授業では文献は参考にするものの、これまでの人生で蓄積してきた自分たちの感性をぶつけ合って資料(花園のデザインなど)を作成した。自分は飯館村の出身者であるから、始めから自分事のように一生懸命取り組んできた。しかし、会が進むに連れ、メンバーがどんどん自分よりも一生懸命にやっていた村のことをこんなにも考えてくれている同世代の子たちの存在をととても嬉しく感じていた。

合宿では、これまでの会合の成果が大いに反映された合宿であった。対象者の大久保金一さんをはじめ、発表をお聞きくださった方々からお褒めの言葉やプラスな意見をいただいた。今回の対象者である大久保金一さんはこの授業期間中にお母様を亡くされた。そして、合宿の前日に体調を崩され、発表は行われなかったことになった。大久保さんに一言挨拶に行くと「今日は調子がいいから大丈夫」と言い、発表を聞いてくれたことが何よりも嬉しかった。

授業を通して、大きく2つのことを学んだ。1つは目的などの根本がしっかりしていないと、後から崩れてくること。『急がば回れ』という言葉があるように、どんなに早く進めたくとも、土台をしっかりと固めておかなければ完成は遠のく、もしくはあまり良いものができないと感じた。2つ目はどんなに良いプランがあっても、実行する“人”、維持管理をしていく“人”がいなければそのプランは無に等しい。地域活性化、被災地復興において“人”という代替物のないこの資源は何よりも尊ぶべきものなのかもしれない。

○岸田 峻太郎 国際情報農学研究室

私は大久保さんと「協働」する。

○上田 大晃 国際環境経済学研究室

「あの日、僕は金一さんとマブダチになった。」

今回は初めての飯館村の訪問だった。特に震災以来放射線を浴びたと言われる地域には行ったことが無く、どのような光景が広がっているのか想像もあまりつかないまま現地に着くと、パッと見た限りでは特に荒れ果てているわけでもなく、しかし何か違和感を覚えた。一つ目は、人が歩いていない事。二つ目は、確かに農地だったとわかる場所に生活感が一切ない事。三つ目は、もうすぐ5年経つが想像以上に復興が進んでいない事。特に行き場のないフレコンバックを見て、再来年の避難解除までの行政の段取りを疑ってしまう気持ちが湧いた。

そのようなネガティブなイメージから入ったのと対照的に、そこにいた人々はいいたでの「誇り」を胸に、非常にエネルギーで前向きで、新しいチャレンジに対しての意欲的な姿勢に、私自身も血が沸き立つような興奮を感じた。それは私たちがプロジェクトのプレゼンをした時のリアクション

から顕著に伝わってきた。その出会いが今でも心を突き動かし、ワークショップ後もこのプロジェクトを継続して、目的を成し遂げたいと考えている。

さて、プロジェクトの成功という観点の話をする、本当にメンバーに恵まれたと思う。このプロジェクトへの本気度は秀でているものがあり、非常に多くの時間を割いて、対象者であった大久保さんの気持ちを徹底的に考え続け、空いている時間の都合上深夜遅くまで会議を重ねたこともあり、プレゼンまでの準備は内容・気力共に客観的に見ても相当充実したものであったと確信している。結果として提案に高評価を頂いたことで、素直に充足感・達成感を味わえた、近頃では最高の時間であった。一方で、授業のグループワークとしての側面を捉えると多くの「誤解」の積み重ねによりチーム全員が同じ方向を向いて歩を進めることはできなかった。その要因は「誤解」を解消しようとする努力の不足でしかなく、なぜならばコミュニケーション面での不断の努力によってしかお互いを理解することができないからである。

しかし必ずしもグループワークの成功が本プロジェクトの成功と一致するわけではない。本プロジェクトの成功には、各々が自らを奮い立たせる明確なモチベーションと主体性を持っている事が前提として必要不可欠なものであり、それが責任感ある行動につながっていくと考える。それはなぜか。自明である。人の人生を扱うプロジェクトであるからだ。無責任な態度は人の「生きがい」を奪いかねない。このようなテーマを授業で扱う際には、前提部分のハードなセクションが必要であることを主張させて頂きたい。

最後に、私自身にとって本プロジェクトは、つまり大久保さんとのご縁は非常に大切なものだと思っている事をあえて記載させていただく。このプロジェクトをセッティングして頂いた溝口先生や林先生、石綿さん、そして飯館の皆様をはじめとして全てのご縁のある方々に心より感謝の意を申し上げます。

○芝原 直也 国際植物資源科学研究室

“大久保さんの想いに、胸を打たれた。”

最初は単純な好奇心だった。国内の社会課題に関する活動の経験がなく、福島に行ったこともなかったため、純粋に福島に行ってみたいという理由でこの活動に加わった。そして大久保さんと出会い、彼の想いに触れるわけだが、上述したように衝撃を覚えた。

大久保さんの説明するマキバのハナゾノ計画は、とても面白かった。懐かしの場所を提供するというユニークなプラン、一人でも花園の形成に取り組む確かな実行力、そして何より、お世話になった人々に恩返しをしたいという強く明確な想いが詰まっていた。この想いを聞き、多くのメンバーの中で今回の活動が授業の課題という枠を抜け出したのではないだろうか。

実際、グループとしては良く頑張った。考え、ぶつけあい、また考える。長時間／期間に渡る試行錯誤はメンバーにとっても決して楽ではない経験だったはずだ。それでもグループとして団結し、最後まで課題に取り組めたのは偏に、大久保さんの想いに強く共感していたためだろう。「人を動かす」ということの意味を実感した。

振り返れば非常に多くを学んだ3ヶ月だった。本活動が私達にとってそうであったように、大久保さんにとっても有益なものであって欲しい。しかし、反省点や改善の余地も多く残り、今後もプロジェクトの成功のために協力したい。それが、私達の大久保さんへの「恩返し」であると言える。

○金子 大成 国際植物資源科学研究室

“いつか桜の下でお酒を飲み交わし、歌い、踊りたい。”

振り返った時にこう思える事が、環境に恵まれていた証拠だ。プロジェクトに対して真摯に取り組む為の環境が整っていた。まずは、その環境を作って下さった関係者の方々に心より感謝申し上げたい。

違った形ではあるが福島再生のプロジェクトを学部時代に携わっていた事もあり、福島再生について興味は元々持っていた。その興味をより深いものとし、現在まで継続させてくれたのは間違いなくメンバーのおかげである。このメンバーだったからこそ、本気で意見をぶつけ合い納得いくまで話し合う事が出来た。課題もいくつか残り、どこかやりきれていない点もまだあるのは事実。それでもこの短期間で、ここまで成果を出す事が出来たのは自信を持てる事だと思う。時間を共有すればするほど、今までと違った顔のメンバーを見れる事が非常に楽しかった。そして、どんどん好きになった。その想いは継続中。そんな仲間とだからこそその成果であり、これからもプロジェクトを継続していけると感じている。

ありがとう。そして頑張ろう。

つい熱くなってしまう、長くなってしまうのでこの辺で。

皆さんどうもありがとうございました。

好きです。そして、体調管理は大事です。仙台。

○安島 悠 国際植物資源科学研究所

来園者にとって「帰る場所」となる素敵な花園になることを願っている。私がこのテーマを選んだのは、東日本大震災の被災地に行ったことがなく、現場を訪れてこの目で見たいという思いと、そこで何か役に立つことが出来ればやりたいという2つの思いが理由であった。

実際に訪れて、作業員の他に住民がほとんど見られない村、うず高く積まれたフレコンバック、客土のため切り崩された山など、衝撃的な光景を目にした。そして、本プロジェクトの対象者である大久保金一さん、飯館出身者のグループメンバーのご家族、飯館村から福島市に避難し花き栽培を続けておられる高橋さんご夫妻、NPO法人ふくしま再生の会の菅野さんなど、飯館村の色々な方々と実際に会って話をさせていただき、震災・原発事故の悲惨な影響を実感するとともに、今と将来への並々ならぬ想いを少なからず聞くことができた。飯館村を訪れ、現地の方々の貴重なお話を聞いたというだけでも、非常に意義深い経験であった。

プロジェクトに関しては、困難は3つあったと考えている。「花園のデザイン」という、かつて行ったことのないテーマを扱ったこと。プロジェクトの向こうに強烈な想いを抱いた「人」がおり、その想いや、人との関係性を十分に考慮すべきこと。そして班の役割分担、班内コミュニケーションといった、グループワークの難しさである。

同時に、それら困難を通して、貴重な気づきと反省点も得られた。一つは、メンバーそれぞれの持つ知識や感覚、経験を活用してグループワークにあたることの重要性。一つは、結局何がしたいのか、なぜそれをしたいのかといった根っこの部分から問題を整理して、議論の前提にすべきということ。そして最後の一つは、人とコミュニケーションを取り、その人の考えや想いを聞くことの大切さである。大久保さんら現場の方々と話をすることは、プロジェクトの根幹や大きな方向性を決定づける大事な事柄であり、本プロジェクトでは、大久保さんの想いや願いといった根本的なところに度々立ち返りながら、アイデアの考案や選定を進めて行った。ただできれば、より多く現場の方々と話し合いの場を持てたら良かったという反省がある。そして、コミュニケーションを通じ人の考えを聞くことは、グループの議論の場でも同様に、非常に重要であった。これについては、毎回の議論の進め方や英語による会話等の難しさと、それに立ち向かう我々の努力不足があり、今後活かしていくべき反省があった。

今回我々が出させていただいた提案が、今後改善され、大久保さんの助けに少しでもなれば良いと考えている。大久保さんの花園が、来園者にとって真に「帰る場所」となり、また、震災の記憶を伝えていけるような素敵なものとなることを願っている。

最後に、このようなテーマを与えてくださった諸先生方、石渡さん、アポイントを受けていただき、貴重なお話をして下さった飯館村の方々、一緒に3カ月話し合ったグループメンバー、そして何より大久保金一さんに、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

○ダニエル ゴンザレス IPADS

◆飯館について:

金銭的余裕がなかったため、また言葉の壁があったため、私は飯館村には行きませんでした。だから飯館村についてはあまり多くを語ることはできません。でも他の人たちのコメントや写真といったものから判断するに、飯館村は住むのに非常に快適なところとは見えませんし、そのことは大変不幸なことだと思います。それは他の人たちのコメントを見るに飯館村の人々は心から飯館村を恋しく思い、そして飯館村のことが大好きであるとわかるからです。他人のやったこととはいえ、ごたごたを解決して飯館村を再び住む価値のある場所に戻すことは人間としての私たちの責任です。

◆グループについて:

・良い点:

1. 私は日本人と同じグループでグループワークをしたことがなかったので、日本人のものの見方と言うのは私とまったく違っていて新鮮なものでした。
2. このグループはとても多様性のあるグループでしたので、多様な背景知識を持った多様な人々を多く抱えていて、そのことが彼らと一緒に働くことを挑戦的で面白みのあるものにしていました。

3. 教員の強力な調整がなかったので、活動に対する高度な責任が（教員ではなく）チームにありました。

・悪い点:

1. チーム内での調整は理解できないものがたくさんありました。多くのメンバーがすでに終わった仕事を繰り返していました。
2. グループ内にあった言語の壁は非常に高いもので、メンバーも壁を取り払う努力を怠っていたためいくつかの混乱が生まれました。
3. 本プロジェクトはゼロから計画を立てるものという認識でいた。しかし実際、私達の活動が始まった時点で大久保さんは多くの計画を持ち、既にそのうちのいくつかを実行していた。つまりは取り組む課題の具体性や可変部分のレベルが当初の認識とは異なっており、結果として最終成果物がどうあるべきか、グループ内で共通の認識を持つことが遅れてしまった。

○ファテミー ムハンマド IPADS

◆飯館村について:

飯館村の第一印象は決して良いものではなかった。今回の合宿は私にとって初めて放射能被害に直面している場所への訪問となったが、放射能汚染された廃棄物で満たされたあの黒いバッグ(フレコンバック)の山を飯館村で見るのは間違いなく恐ろしい体験であった。

また飯館村中にある空き家を見るのは悲しい体験だった。飯館村では避難指示が出されていて、またその村は今住むことができない場所になってしまっているため、村に住んでいる人は誰もいなかった。その村の人々のため、そして村の復興のため何かしないといけないと感じた。

◆グループについて:

・良い点:

1. グループの皆さんは優秀でフレンドリーだ。このグループの皆さんと一緒にプロジェクトをやることができ 素晴らしい機会だった。
2. グループのメンバーはそれぞれ専門性を持っていて、バラエティに富んだチームだった。
3. 皆しっかり期限を守っていた。
4. 皆協力的だった。我々は期限を守るために皆と一緒に協力できた。ディスカッションを通じて飯館村の市民のためという気持ちが次第に芽生え、心から思っ て取り組むことができた。
5. 飯館村出身の人がグループ内にいたので、リアルな状況を知ることができた。

・悪い点:

1. このグループ分けは我々が自分たちでディスカッションをして決めるべきであった。しかしTAによってグループがサブグループに分けられてしまったため、グループワークのはじめからとても良いコミュニケーションのチャンスを逸してしまった。
2. 前年のレポートは例として参考にするのは良いが基準にはできないと思う。ルールが多すぎるとアイデアを制限し創造性を失ってしまう。

8. 参考文献

- 1) 「海よ里よ、いつの日に戻る——東日本大震災3年目の記録」 寺島英弥（著） 明石書店
- 2) 「マキバノハナゾノ通信」 （ふくしま再生の会ホームページより）

http://www.fukushima-saisei.jp/app-def/S-102/madei/wp-content/uploads/2014/08/20140525_poster25_MakibaNoHanazono.pdf

9. 謝辞

本稿を作成するにあたって多くの方々にお世話いただきました。

まず私たちのグループの対象地の持ち主である大久保金一さんには、インタビューをはじめとして全面的に協力していただきました。私たちの提案したアキバノハナゾノのデザインを気に入っていただけで大変うれしく思います。これからマキバノハナゾノの造成にあたって大変な労力がかかると思いますが、一緒に協働していきましょう。本ワークショップの間にお母様のコトさんがお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

飯舘村から福島市飯野町に移って花卉栽培を継続されている高橋日出夫さん・民さん夫妻には、忙しいなか農園を案内していただきました。教えていただいた知識は大久保さんへのプレゼンの中で花卉栽培についての知識に活かされました。土壌の栄養面および放射能の栽培物への影響の面から考えて、花卉栽培が飯舘村の中でも継続するという知見をいただけたことは大きな収穫でした。

ふくしま再生の会の菅野宗夫さんには、大久保金一さんへのプレゼンの前日にインタビューさせていただきました。そこで宗夫さんのおっしゃっていた言葉は今回のプレゼンのみならず、今後の復興指針となるべきものであると思います。（曰く、復興とは人間の再生である。人間が希望を持って生活できるようになることが復興であるという意味です。だから物質的で目に見えるものだけでなく、希望のように目に見えないものも復興させることが大切なのです。L'essentiel est invisible pour les yeux. 大切なものは目に見えないんだ。「星の王子様」サン=テグジュペリ）

前掲の菅野宗夫さんおよび同じくふくしま再生の会の若林一平さん、小川唯史さんには大久保金一さんへのプレゼンの現場に立ち会っていただき、プレゼンについての有益な意見をいただきました。ふくしま再生の会のみなさんとはこのプロジェクトを通じて長くお付き合いいただきたく思っております。どうぞよろしく願いいたします。

東京大学農学生命科学研究科国際情報農学研究室秘書およびサークルまでいメンバーの丹羽泰子さんには現地訪問前の事前知識として福島を訪れた時の様子や、サークルまでの活動についてお話を聞かせていただきました。

東京大学大学院農学生命科学研究科教授およびふくしま再生の会副理事長の溝口勝先生には農学国際専攻特論Ⅰの監督をしていただきました。温かく見守っていただきありがとうございます。

東京大学大学院農学生命科学研究科特任助教の林直樹先生には、前年の特論Ⅰの時のことを参考に書類作成に大変なご助力をいただきました。当日もご同行いただき、グループの一員が急遽熱を出してしまった際にも、冷静な判断と対応をして頂きました。飯坂温泉駅から東京駅までの長い道のりを同行までして頂きまして、本当にありがとうございました。

東京大学ソーシャルICTグローバルクリエイティブリーダー育成プログラム事務局（GCL事務局）様には本グローバルデザインワークショップB、C(GDWSC)および農学国際専攻特論Ⅰについて大きな金銭的助力をいただきました。GCL事務局様なしには本GDWSCおよび特論Ⅰは遂行できませんでした。謹んでお礼申し上げます。

10. 付録

飯舘村地域おこしインターンシップ制度の確立に際して「飯舘村地域おこしインターンシップ制度」と「村役場の人へ」という形で、以下構成してあります。

～飯舘村地域おこしインターンシップ制度～

【はじめに】

東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故により、福島県の原発周辺地域では多大なる被害を受けた。原子力発電所から北西に約30~50kmに位置する飯舘村では、現在も住民の避難生活を余儀なくされている。震災前までの飯舘村では畜産を中心とした営農が盛んであった。震災後は、風評被害が懸念される、後継者がもともといなかった、避難先に土地がないなどの理由から離農者が後を絶たない。

そんな中、避難先や飯舘村内で営農を再開する方々がいる。避難先や村内で営農を再開するには我々が考えている以上の葛藤や努力があった。営農以外にも、飲食店やコンビニ、宿泊施設の経営を再開している方々もいる。しかし、彼らも中山間地域にみられる担い手問題に直面しているのが現状である。

地域おこしに関するインターンシップ制度が確立すれば、担い手問題の解決だけでなく、飯舘村との関係の持続や経営再開者におけるモチベーションの向上にもつながることが想定される。この活動を通して最終的には飯舘村内だけでなく、被災した飯舘村周辺地域、被災地受け入れ地域とともにこの活動を連携して行い、被災地復興・地域の活性化に貢献していきたい。

【目的】

被災地にかかわりたいと考えている人を対象に、飯舘村民の中の経営再開者にてインターンシップ(以下、「研修」とする)を行う。

【インターンシップ内容】

受け入れ先によって、研修内容が異なります。

- ・畜産農家(肉牛、乳牛)での研修・体験
- ・花卉農家での研修・体験
- ・飲食店での調理・販売・接客
- ・被災地域内のコンビニでの販売・接客
- ・介護施設での研修
- ・交流イベントをはじめ、さまざまな地域おこし活動
- ・地域復興支援員、NPO法人ふくしま再生の会の業務手伝い

※研修の時期や本人の希望及び適性に応じて、研修の内容を調整します。

【募集対象者】

平成29年4月～平成29年12月のうち、1週間、2週間、1ヶ月(最長6ヶ月まで期間延長が可能) ※研修開始日は要相談

【募集人数】10名

【求める人材】

- ・チャレンジ精神のある人
- ・被災地復興に関わりたいと考えている人
- ・自然が身近にある生活をしたい人
- ・飯舘村に興味・関心がある人

※ひとつでも当てはまれば、ぜひご応募ください。年齢は不問です。

【生活補助費(情報発信費)】

5万円/月(以下、内訳)

→研修の様子をブログやTwitter, Facebookなどでの情報発信：3万円/月

→毎月の外部視点からの地域課題等のレポート提出：2万円/月

【勤務時間】週35時間のフレックスタイム

【休日】週2日 ※作業、状況に応じて変動

【保険】

下記補償内容の傷害保険に受入コーディネーター組織で加入

- ・死亡、後遺障害：1,000万円

・入院：3,000円／日

・通院：2,000円／日

【必要な資格】普通自動車免許

【滞在費】不要(ただし、食費は実費負担)

【備考】

研修後、以下のサポートが可能です。

・大学単位の取得おそらく可能(単位取得に際してはご相談ください)

・飯館村および周辺地域での仕事の紹介

☆最寄り駅となる福島駅から受け入れ団体(滞在地)に送迎します。

【問い合わせ先】

・福島県飯館村役場(飯野出張所)

HP：<http://www.vill.iitate.fukushima.jp/index.html>

電話：024-562-4200(飯野出張所)

メール：iitateweb@vill.iitate.fukushima.jp

・佐藤聡太

～村役場の方へ～

【飯館村としての対応】

・予算は『陽はまた昇る基金』などのこれまでに頂いた復興支援金を活用。

・インターン担当者をまずは1人設ける。

・インターン内容の明確化(特に誰の所でインターンシップができるか明らかにする)

→その際、最も人出の必要な時期や希望人数を把握する。

・保険の加入

・滞在場所、ネット環境、交通手段の確保

・最低1回は歓迎会を行い、村民や役場職員との交流する機会を必ず設ける。

→飯館村の小学校、中学校、高校の生徒と触れ合える機会もしくは授業をしてもらうと良い。

【想定している勤務地】

以下、村内、村外の2つに分けて説明。

→研修時期や本人の希望及び適性に応じて、研修の内容を複合させるのも良い。

① 村内

肉牛農家→山田猛史さん、佐藤一郎さん

花卉農家→大久保金一さん、高橋日出夫さん

イチゴ農家→佐藤博さん

介護→三瓶政美さん(いいたてホーム)

セブンイレブン→佐藤祐太さん

ボランティア業務→田尾陽一さん(NPO法人ふくしま再生の会)

イベント業務→菅野典雄村長(飯館村役場)



写真. 高橋日出夫さん(右)



写真. 大久保金一さん(下中央)



写真. 菅野典雄村長

② 村外

肉牛農家→小林将男さん、小林稔さん、菅野義樹さん

乳牛農家→田中一正さん(復興牧場フェリスラテ)

飲食店→市澤秀耕さん(カフェ)、高橋善治さん(手打ちうどん)、赤石澤榮さん(ラーメン)



写真. 小林将男さん(右中央)



写真. 菅野義樹さん(中央)



写真. 高橋善治さん(左下)

【参考】

Q.もっと具体的に受け入れ態勢に関して学びたい場合は？

→多田朋孔さん(新潟県十日町市地域おこし実行委員会 理事・事務局長、
http://www.soumu.go.jp/main_content/000363129.pdf)に相談する。

Q.他の地域おこし協力隊を紹介してほしい。

→新潟県十日町市、埼玉県秩父市、岡山県美作市の協力隊員だった人とコンタクト可能。

→毎年、東京で地域おこし協力隊による報告会が行われているはず。

Q.このデータの参考文献は？

→十日町市のインターンシップメニュー紹介：

http://www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Article/773/26/tookamachishi,0.pdf